
DQ1 勇者の末裔

イズミ昭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DQ1 勇者の末裔

【Nコード】

N6621L

【作者名】

イズミ昭

【あらすじ】

ドムドーラに住むロトの末裔の一人であるアリスは、父の意志を継ぎ町を守る護衛団に所属している。弟のアレフを見守りつつ、今日もいつものように護衛団の仕事に出かけて行った。

プロローグ 1（前書き）

ドラゴンクエスト1の二次創作です。アリスという女性が主人公でオリジナルキャラやストーリーが展開する予定です。原作に忠実ではないと思いますので、読まれる際には注意してください。

プロローグ 1

昔々、アレフガルドは光を失くしていました

悪い魔物が光を奪ったのです

光を奪った魔物の王様が、手下の魔物に命令して、人々を苦しめていました

そしてある日

見知らぬ若者が現れ、悪い魔物を懲らしめてくれました

悪い魔物がいなくなると、アレフガルドは光に満ち溢れ、人々の顔に笑顔が戻りました

「その『わかもの』が『ゆうしゃロト』なんだよね！」

どの子供も、幼い頃に必ず聞かされる物語が、この『勇者ロト』の話だった。

本によつては小難しく書かれている場合もあるが、大概の場合、子供でも読めるように簡単に書かれている。

アリスがたった今、弟のアレフに読み聞かせたばかりのこの本も、子供向けに簡潔に書かれたものであった。

アレフはこの前5歳になったばかりだった。字を覚え始め、最近ではアリスが本を読み聞かせようとすると、自分で読みたがり、アリスが読むそばから次の場面を話し始めたりと、自ら進んで覚えようとする好奇心旺盛な子供だ。

興味があるのは本だけではない。剣術や魔法にも興味を示し、まだ5歳だからと教えたがらない大人を尻目に、幼いながらも自己流で学ぼうとしているようなのだ。

「姉さんや義兄さんが亡くなったときは不安だったけど、しっかり

した子に育ちそうだね」

武器屋の息子と遊びに出かけてしまったアレフを見送り、アリスが本を片付けていると、お世話になっている叔母が笑顔でそう言ってきた。

「うん。でね叔母さん……その、そろそろかな、って思ってるんだけど」

腰まである長い髪を邪魔そうに結びなおしながら、アリスは叔母に向かって言った。

「……まだ早いんじゃないのかい？もう少し先でも遅くはないでしょう？」

「アレフはもう大丈夫だと思う。その辺の子供よりも頭もいいし、運動神経もいい。……先延ばしにしていると、手遅れになりそうで」

「勇者ロトの末裔だからといって、人より剣術や魔法に優れなくていいのよ。末裔といったって、血縁関係を探せば、いくらでもロトの血を引く人はいるでしょうに」

叔母は心底心配そうに言ってくれるのだが、アリスは無言で首を横に振り、そのまま家の外に出て行った。

アリスは大きく伸びをした後、いつも肌身離さず持っている首飾りを手に取った。

アリスの家に代々受け継がれてきたそれは、両親が亡くなってからはアリスがずっと持ち歩いている。

勇者ロトが大地の精霊ルビスより授けられたと伝えられているこの証は、本来ならば後継者であるアレフが持つべきものだった。しかし、彼はまだ幼すぎるので、姉であるアリスが今は所持しているのだ。

「あれ？アリスちゃん、今日は休みなのかい？」

道具屋のおばさんが、注文していた薬草を届けにきてくれた。

「うん。最近ずっとだったから、弟がかわいそうだからって無理矢理連休を押し付けられた」

笑いながら言うと、おばさんは苦笑しながら薬草を籠に入れて渡

してきた。

「心配だよ。アリスちゃんは女の子でしょ？なんでまた町の護衛団なんかに入っちまったんだい」

砂漠に囲まれた町のドムドーラだが、ラダトームとメルキドの中間にあるので、二つを結ぶ交易として栄えていた。商人が主に多いこの町を、昔から守っているのが護衛団だ。

「父が誇りを持ってしていた仕事だし。それに、機織やら商売やらをするよりは、剣を振り回して町を守る方が向いてるしね」

アリスたちの父は護衛団の団長を勤めていた。しかし、2年前に集団で襲ってきた死のサソリから部下達を守る為に奮闘し、その時に受けた怪我が元で亡くなっている。

「ほら、最近は凶暴なモンスターが増えてきてるから、護衛団は多い方がいいし」

護衛団は本来なら、人間相手に町の人や旅人を守るのが仕事だった。だが、数年前あたりからモンスターを退治する仕事が増えてきている。おそらくこの町も同じ状況なのだろう。町に入ればモンスターから襲われる心配が無いのは、昔からある護衛団の働きによるものだ。

「昔はもつと他の町との交流が盛んだったのに、最近じゃあ、少し町を離れるのにも聖水が欠かせないのよねえ。護衛をつければ安心だけど、モンスターも強くなっているって聞くし」

そうなのだ。昔からモンスターはいるにはいたが、意志を持って人を襲ってくるという事は無かった。しかし最近では、よく人を襲うという事を耳にする。無害だったモンスターまでもが人に襲い掛かってくる事もあるという。

「アリスちゃんの家は、勇者ロトの末裔なんだったね。でも、だからってアリスちゃんは無理しちゃだめだからね」

「おばさん……」

2年前の出来事以来、アリス姉弟は町で有名になってしまっていた。この町にいる勇者ロトの末裔の生き残り。だがしかしこの二人

に勇者として期待する者はいなかった。

それはアリスが女性であり、弟の方はまだ幼い子供だったからだ。町の者が望んでいるのはすぐに現れる勇者であり、これから勇者になるまで数年もかかるような子供には期待を持ちはしなかった。

ここ数年でモンスターは更に増えている。アリスの父が生きていれば、とは最近よく聞く言葉だった。

「……それじゃあね。あんまりアレフ君をほっとかないようにね」
道具屋のおばさんを見送ったアリスは、薬草の入った籠を一旦家に置いてから、アレフを迎えに出かけた。

（私が男だったら、とつくに旅立ってただけだなあ）

昔から勇者ロトに憧れていた。男の子達に混じって勇者ゴツコななんてものでしていたが、女の子なんだからとよく怒られていた。

それでもアリスは負けじと剣の練習をしていた。母には呆れられていたが、父からは筋がいいと剣を教えてもらえる事が出来た。勇者ロトは剣と魔法の両方を使えたと伝わっているのだが、残念ながらアリスは魔法の方はあまり得意ではなかった。町で一番の魔法使いに魔力を調べてもらった事があったのだが、一応魔法は使えるものの、強力な魔法は覚えられないと断言された。

（……でも、私はダメでも、アレフは大丈夫）

今はまだ幼いアレフだが、彼はきつと勇者になる。

剣はまだ持てないが、父もアリスも剣に関しては得意としている。きつとアレフも覚えがいいはずだ。

そして魔法。アリスは一応使えるといった程度だが、アレフからは強力な魔力を感じると、アリスと一緒に調べた時に町一番の魔法使いは驚いていた。まだ幼いため秘められてはいるが、成長するにしたがってその魔力は凄まじいものになるといわれた。

きつと、アレフこそが皆が望んでいる勇者になる。それまではアリスが全力で守らなければならない。

「あ、おねーちゃん！」

町の広場でアレフがドロだらけになりながら手を振っていた。

「もうちょつとあそんでいい?」

「ダメ。もうすぐ暗くなるでしょ?」

周りを見渡すと、アレフ以外の子供は1人しか残っていないかった。他の子供や、一緒に遊んでいるはずだった武器屋の息子はとくに帰っているようだ。

「だって、ユウがまだあそびたいって」

「ユウ?」

アレフの横にちょこんと立っている子供に目を向けると、その子供はモジモジと下を向いてしまった。

アリスは首を傾げた。この町の住民の殆どは顔見知りのはずなのだが、この子供は見た事が無い。

「ユウ君も早く帰らないと。お家の人心配するよ」

しゃがみながら優しく言ってみるが、ユウと呼ばれた子供はアレフの後ろに隠れてしまった。

「おうちのひと、いないっていつてた」

「いないって……」

「な?」

アレフがユウの方を向くと、ユウはコクンと頷いた。

(……もしかして、旅人の子供かなにかかな)

「ユウ君はこの町の子じゃないよね?あ、別に言いたくなかったら言わなくてもいいよ」

ユウはアレフの服の袖を握り締めながら、アレフとアリスの顔を交互に見た。

「……うん。ここははじめて来た」

「お母さんとお父さんは」

「いない」

「……」

辺りは相当薄暗くなってきた。こんな小さな子供をこんな時間まで迎えに来ないなんて、この時世で考えられない。旅の途中だとしてもだ。

「……じゃあ、家に来る？よかつたらでいいけど」

「え？ユウうちにくるの？」

嬉しそうにアレフがユウの両手を握り締めた。

「……いいの？」

「お家の人がいらないんじゃ、ほつとくわけにはいかないしね。一人ぐらい増えたって大丈夫でしょ」

アレフは喜びながらキョトンとしているユウに抱きついた。どうやらユウをかなり気に入ったようで、ユウはそんなアレフに少しはにかんで、そしてアリスに向かってぺこりとお辞儀した。

こうして、成り行きでアリスの家に1人居候が増えた。アレフは単純に喜んでいるようだが、アリスと叔母はそういうわけにはいかなかった。

商人や旅人の中で迷子になった子供がいなかった、アリスは休暇中に様々な方面に当たり、ユウの両親を探した。しかし、護衛団に所属していて町の内外の情報が一番よく入るアリスでさえ、ユウの両親の消息は掴む事が出来なかった。

出した結論は、ユウの家族の中でユウだけが生き残り、この町に辿りついたということだった。

こういった事例はこれまでも無かったわけではない。モンスターが増え、凶暴化してきている最近では、旅の一団が対抗手段の無いまま襲われ、生存者は極少数という事もある。

（多分、ユウだけが逃げる事が出来たのかも。でも、聞かない方がいいかな）

ユウはまだ幼いし、もしかしたらあまりの恐怖で家族と離れなければならなくなった出来事を忘れてしまっている可能性もある。わざわざ思い出させる事も無いだろう。

叔母も、家族が増えたと喜んでいるようだった。アリスやアレフと違い、あまり活発ではないユウだったが、そんなところも気に入っている様で、もし行くあてがないならずっといても構わないとさえ言っていた。

今日もアレフとユウは二人で遊びに出かけるようだ。本当に仲の良い二人に、アリスは思わず笑みを浮かべていた。叔母はそんな様子を眺めながら、小さくため息をついた。

「もつと安全な世の中だったら、ユウ君のご両親とも会えたんでしようけれどね」

「……うん」

そのためには、今、自分に出来る事をしなければならぬ。

「それじゃあ、私は護衛団に行つて来る」

愛用の父の剣を持ち、アリスは今日も町を守る為に出かけていった。

プロローグ 2

町が燃えている。

歴史も何もかも飲み込んで、砂漠の中のオアシスであるドムドールの町は、火の海に包まれていた。

遡る事約1時間前、アリスはアレフとユウを寝かしつけ、日課である父より譲り受けた剣の手入れをしていた。

窓から外を見上げれば満天の星空で、きっと明日はいい天気になるんだろうな、とぼんやりと眺めていた。

「アリスさん、まだ起きてるの？」

突然声をかけられ、アリスは視線を部屋の入り口へ向けた。そこには、枕を片手に抱きかかえたユウが立っていた。

「ユウ、どうしたの？眠れないの？」

「……」

ユウは無言でアリスの横に座ると、枕を抱えながら先ほどのアリスと同じように窓の外を見上げた。

「僕、ずっとここにいたい」

「ユウ？」

「……アレフと、アリスさんと、叔母さんと。ずっとずっと、一緒にがいいな」

急に不安になったのかな、と思いアリスはユウを抱きしめた。

「いてもいいんだよ？アレフも叔母さんも、私もユウの事が大好きなんだから」

活発なアレフとは違い、ユウはどちらかというと傍から見ればアレフに振り回されているという印象を受ける。けれどユウは嫌がる事はなく、アレフのとぼっちりで怒られたとしても、嬉しそうに笑ったりしていた。

周りの大人からどう見られているか、それを踏まえて行動できる頭のいい子供だった。けれど、だからこそアレフのように怒られる事を恐れず自由奔放に動き回る事に憧れているのだろうか。

おそらくアレフと同じ年なのに、居候という立場を理解し、迷惑にならないように行動する。もつと遠慮なんかせず、我俣を言ってもいいのにと、アリスは思いながらユウの髪の毛をぐしゃぐしゃにするように頭を撫でた。

「アリスさん……ひどいです」

「ユウがガキらしくないからだよ」

アリスが笑うと、ユウは初めは口を尖らせて髪の毛を直していたが、直し終わって「戻ります」と言った横顔は少し笑顔だったような気がした。

「……あ。そうだ、アリスさん」

入り口まで歩いたユウは、思い出したようにクルリと振り返り戻ってきた。

「これ、あげます」

「これ……どうしたの？」

ユウの手に握られていたのは、竜のうろこだ。

「僕のお守りです。アレフにもさっきあげました。叔母さんには明日の朝にあげます。……みんなおそろいです」

照れ笑いをしたユウは、アリスの手に竜のうろこをギュツと握らせた。

「ありがとう。みんなおそろいって、なんかいいね」

「……それじゃあ、おやすみなさい！」

顔を真っ赤にしたユウは、駆け足で部屋に戻っていった。

初めてユウの一面が見られた気がしたアリスは、嬉しくて貰った竜のうろこを何度も眺めた。

殆ど荷物を持っていなかったユウは、お金もまったく所持していなかった。まだ小さいのでアリスと叔母は二人にはお小遣いをあげていない。そう考えるともしかしたら、これはユウの家族の形見な

のかもしれない。

（大事なものだろうに）

それをアリスたちにくれたと言う事は、家族としてみてくれているということなのだろう。

（なんか……嬉しいな）

顔の筋肉が緩みっぱなしだった。

ユウが家族として三人を見てくれている。

本心がなかなか分からないユウだっただけに、アリスは嬉しくて仕方がなかった。

だが、異変は突然訪れた。

そろそろ寝ようと窓を閉めようとしたその時、護衛団の夜勤用の宿舎からのろしが見えた。あれは、尤も緊急な事態に陥った時ののろした。

（緊急招集？何があったの？）

いまだかつて訓練でしか見た事がないそれに、アリスは不安を感じながら急いで支度をし、叔母を起し後を任せると護衛団の下へ駆けつけた。

そこで団長から聞いた言葉は、想像を絶するものだった。

深夜、ラダトームへ護衛の仕事で遠出していた団員が1人、傷だらけになって戻ってきた。

ラダトームへ向かった団員の数は20人。報告の為に彼だけが、ドムドーラへ戻るように魔法をかけられたキメラの翼を使い戻ってきた。

彼の報告によれば、数え切れない数のモンスターの群れがドムドーラへ向かっているという。

団員達は一丸となり食い止めようと必死になったが、後から後から湧いて出てくるようにモンスターに襲われ、1人2人と倒れていた。食い止めきれないと判断したリーダーにより、彼1人を何とか戻したというのだ。

おそらくすでに団員達は全滅している、と涙ながらに彼は言い、一刻も早く一般人を逃がすように告げると気を失ってしまった。

「団長！！」

団員達が団長に判断を求めた。ラダトームへ向かった団員達は決して弱くはない。それなのにまったく歯が立たなかった。今ここに集まっている団員達もモンスターと個々で対峙すれば負けはしないだろうが、あまりにも数が多すぎる。

「この町は終わりだ」

しん、と静まり返った集会場で団長は言った。

「町の人たちと旅の者を逃がす事を優先する」

団長はそう言つと、団員達を二手に別れさせた。

一つは、避難民をメルキド方面へ逃がすための護衛。

そしてもう一つは、避難民を逃がすためのしんがり。

二つに分けると言つても、殆どがしんがりだ。人々を逃がすには、出来るだけモンスターを足止めする必要がある。だからといって非力な人々だけを逃がすわけにはいけないので、最低限の護衛をつける。

そしてその護衛に真つ先に選ばれたのはアリスだった。

「私は最期まで残ります！」

アリスは護衛に選ばれた瞬間にそう答えていた。

「団長命令だ。君には民を安全にメルキドまで案内する役目を与える」

言い争っている時間などはない。アリス以外の護衛の役目の者達は、とつくに町中へ行つて広場に人を集めだしている。

「私はこの町が好きです。父が最期まで守つたこの町を、人を……私も最期まで守りたい！」

護衛も大事な役目だと分かっている。だがアリスは生き残る可能性がほぼゼロであっても、モンスターの足止めを志願した。

一匹でも多く足止めをすれば、それだけ人々は安全に逃げられる。

たとえ焼け石に水だとしても、1人で部下を守りきった父のように、最期まで数多くのモンスターを倒したかった。

「……君の家は、正統なロトの末裔だ」

団長はアリスに背を向けたまま言った。

「いつか、君の弟が勇者として立ち上がってくれるだろう。君はその勇者を育てる義務があるんじゃないのか？ロトの末裔として！」

アリスは唇を噛み締めた。

弟をロトの末裔として、そして世に平和をもたらす勇者として育てる事は、アリスが父を亡くした時より自らに課した使命だ。

「君は父親の背中を見て育った。そして今は立派に団員として勤めを果たしている。次は君が父親と同じように、弟に立派な姿を見せる番ではないのか？……皆、アレフが幼すぎるから期待していないように見えるが、心の底では正統なロトの末裔として、いつか勇者に育つと信じている。だから、君は皆の希望であるアレフを守るために行きなさい」

「皆の、希望……」

「さあ、行きなさい！」

アリスは意を決したように団長の背中に向かって敬礼をすると、町の人々の下へ駆け出していった。

町の広場に到着すると、すでに半分以上の人々は町の外へ避難した後だった。

「おねーちゃん？！」

息を切らして駆けつけたアリスを見つけたアレフが、一目散に駆け寄ってきた。

「モンスターがきたんだよね？」

「うん。だから、早く町の外へ避難するの」

言いながらアリスは周りを見渡した。どうやらアリスたちのグループが最後のようで、他の団員達が人数の確認や、逃走ルートの確認をしている。

「遅いぞアリス！すぐに出発するから、お前は最後尾の警備に当た

れ！」

「はい！」

アリスは同僚の団員と共に、人々の最後尾へ回った。するとアレフもアリスと離れまいと、一緒に最後尾まで着いてきた。

「アレフは叔母さんと一緒にいなさい」

「やだ。オレ、このなかでいちばんのおにいちやんだから、うしろからまもってやるんだ」

アレフの言うとおり、このグループの中にいる子供は皆アレフより小さい子供ばかりだった。だからだろうか、泣きじゃくる子供達のなかで、アレフは泣くのや恐怖を我慢し、自分より小さい子供を勇気付けようとしている。

「そっか。……あ、ユウは？」

見渡してもユウの姿が見当たらない。当然のように一緒に居るのかと思ったのだが、このグループ内の何処にも見当たらなかった。

「ひとがいっぱいいいて、ユウはいなくなっちゃったんだ」

避難している最中の人込みで、ユウとはぐれたらしい。

「じゃあ、きつと先に避難してるんだろうね」

町にはもう人はいなかったのを確認している。警戒態勢で明らかに危険が近付いている中、あの頭の良いユウが戻るという判断をするとは考えられなかった。

「ほんとうは、オレたちといっしょにいきたかったとおもうよ」

アレフの言うとおり、ユウはおそらくアレフ達と避難したかっただけだが、はぐれた時に人々に流されてグループ分けされ、先に避難する事になってしまったのだろう。

「おねーちゃんがくるってユウがしってたら、ぜったいにまっていたのにな」

二人はアリスが護衛としてくると団員から聞いていたため、アリスが来るまで絶対にいかないと待っていたらしい。

最後のグループであるアリスたちは、各グループに振り分けられた聖水をまきながら、夜の砂漠を歩き始めた。

地上からは砂の凹凸で隠れられるのだが、空から来たモンスターからは丸見えだ。早く砂漠を抜け、山脈を通り抜けなければならぬ。

砂漠を移動する為に荷物もギリギリだ。立ち止まっている暇はなかった。

「……！」

大きな爆音が町から響いてきた。とうとうモンスターの群れが町にたどり着いたのだ。

「お、おねーちゃん……」

それまで気丈に振舞っていたアレフだったが、その音を聞いた途端アリスの袖に掴まってきた。

「アレフ、大丈夫だから。町で皆がモンスターをやっつけてくれるから」

慰める為に発した言葉がむなしく聞こえた。

人々を逃がすため、町に残った彼らは死ぬ為に戦っている。

生き残れるだなんて、誰も思っていない。町に残った団員も、そして護衛として人々を守っている団員も。

「……」

アリスは何度も振り向いた。

人々の護衛は大事だ。現に移動している間もモンスターと遭遇し、そのたびに団員がモンスターから人々を守っている。

人々を守る。アレフを守る。そして、アレフを立派な勇者に育てる……

「……私……」

どれも大事な事だ。分かっている。しかし、
「……やっぱり、私は……」

父は、死ぬかもしれないと分かっているでも部下を守る為に最後まで戦った。立ち向かわずに部下と共に逃げるという選択もあったはずだ。しかし、逃走中に襲い掛かってくるモンスターにより部下を失う可能性と、逃げた事により放たれたモンスターの被害を考えて、

たった1人で立ち向かったのだらうとアリスには分かっていた。

父は死ぬつもりはなかったのだ。死ぬかも、というのは、確実に死ぬというわけではない。父は戦って戦って、そしてその戦いに勝った。戦いで死にはしなかったのだ。

部下を守る。人々を守る。だからあえて自ら戦いの場へ向かっていた父。守る為に自らが死ぬというのは、それ以後その人たちを守れなくなるという意味だ。だから父は死ぬ為に向かうのではなく、皆が生きる為に向かった。

戦いで死んだのではない。受けた毒が原因の、しかも本当は治るような毒だったのに、その年は毒消しが不作で、父が他の人を優先していたため間に合わなかったが為に命を落とした。

決して、人の命も、自分の命も無駄にするような父ではなかった。だからこそアリスは、その父を目指しているのだ。

「……私は、やっぱり戻る！」

一匹でも多く足止めをする。死ぬ為に戻るのではない。人々を守るため、他の同僚が少しでも生きられるようにするため、そしてもちろん、自分も死なないために戻るのだ。

生き残れるとは思えない。でもそんなこと誰が分かるというのだ。やってみなければわからないし、1人でも多い方が他の者も生き残れる可能性が増えるはず。

「アレフ、これ、預かっていて」

そう言いながらアリスは胸元からロトのしるしを出した。

「これ、とても大事なもののなの。だから、私が戻ってくるまで預かっていてね」

ロトのあかしをアレフに託す。絶対に戻ってくるため。

「……わかった！」

アレフは、これをアリスがずっと大事に持っていたことを知っていた。アリスからしるしを受け取ると、胸元でギュツと握り締めた。「じゃあ、オレからはこれをわたす！」

言いながら、アレフはポケットから何かを取り出した。

「え……これ」

「ユウからもらったんだ。……バレるとおこられるんだから、ぜったいにあとでかえしてよね」

アレフの小さな手に握られていたのは、つい1時間ほど前にユウから貰った物と同じ物だった。

「……じゃあ、後で交換だね」

「うん！」

「ちゃんと返さないと、ユウは、アレフが大事なお守りを失くしたってガツカリするだろうね」

「う……だから！なくさないでね」

ロトのしるしと交換するように、アリスはアレフから竜のうろこを受け取った。そしてそれをロトのしるしをつけていた首飾りの紐につけると、アリスを制止する同僚を振り切り、町へと戻って行った。

プロローグ 3

燃え上がる町。次々と倒れていく同僚、そしてモンスター。冷静に考えられる状況ではなく、次から次へと襲い掛かってくるモンスターをひたすら倒す。その繰り返し。

「うわああああっ!!」

人の絶叫なのかモンスターの咆哮か、それとも自分の叫び声なのか。

それすらも分からず、ただただ戦い、そして押されていく。

同僚の位置さえ確認できず、アリスは襲い掛かるモンスターをひたすら切っていた。

なけなし魔力での回復もすぐに尽き、父から譲り受けていた剣も酷い有様だ。

がむしやらに戦った最後の記憶は、立ちふさがったドラゴンの口から放たれた炎に包まれたところで途絶えた。

眩しい光を感じ、アリスは薄っすらと目を開けた。

「……？」

「あーアリス先輩!!」

近くで聞きなれた声が聞こえてきた。

「……クロード？」

クロードは護衛団でのアリスの後輩だ。彼が新人の頃からよく面倒をみていたためか、よくアリスに懐いていた。

「はい!……バリー先輩!アリス先輩が目を覚ましました!!」

傷だらけのクロードだったが、目を覚ましたアリスに笑顔を向けると、アリスの同僚であるバリーに報告に行ってしまった。

「ここは……っ」

アリスは体を起そうとしたのだが、所々痛みが走り顔をしかめ、

一旦体の力を抜いた。

仰向けになりながら、アリスは頭だけを動かして周りを見た。

アリスのほかにも横たわっている人がいたが、数えるほどの人しかいなかった。

「気がついたか」

「……バリー……ここは？」

「砂漠を抜けたところだ。我々は今、ラダトームへ向かっている」
ラダトーム、とアリスは口の中で呟いた。

「町は」

「……陥落した」

バリーはアリスの隣に座ると、懷から果物を出してアリスに渡した。

「生き残ったのはこれだけだ。……俺も、片腕をやられた」

「……っ」

痛みを堪えて体を起したアリスは、バリーの左腕が半分以上無くなっているのを見て何も言葉が出なかった。

「ま、生きてただけでもよかったかな」

小さく笑うバリーだが、すぐに表情に影が差した。

あの夜から1週間が経過していた。

戦いの最中、突然モンスターたちが一斉に町から退却していった。そして町に残されたのは満身創痍の護衛団が十数名ほどだった。

動ける者たちは、息のある者たちだけを集め、そしてこの異常事態の報告の為にラダトームへ向かう事になったのだ。

だが、たどり着ける者がいるかどうかは分からなかった。

ドムドーラから砂漠を抜けるには、最短ルートでも4日はかかる。ただでさえ砂漠の移動は危険がつくというのに、彼らには移動する事さえ苦痛な状態であり、しかも半分以上が動けない怪我人だらけだった。

「本当に、運が良かったとしかいいようがない」

バリーは、残っている左腕部分を擦りながら遠くを見つめた。

このままでは息絶えるのを待つしかないのか、と絶望していた彼らの存在に気がついた者達がいたのだ。

それは、メルキドからラダトームまで物資を運ぶ商人の集団だった。メルキドからラダトームへ行く間にはドムドーラを経由していくのが一般的なルートであるため、彼らはドムドーラへ立ち寄ろうとして異変に気がつき、そして近くにいた護衛団を見つける事が出来た。

商人達は、とりあえず砂漠を抜けるまでの間は同行してくれた。そして治療道具も提供してくれたのだが、これだけの怪我人と旅を続けるのはリスクが多いと、ラダトームにいたら応援を呼ぶ約束をしてここで別れたのだった。

「……王から褒美がもらえるだろうから、打算はあったんだろうけどな。砂漠越えだけでも商人達が協力してくれたのはありがたかった」

「ここでキャンプ出来るようにって色々と残していったんだぞ。打算だけじゃねーよ」

聞き覚えのない声に驚き振り向くと、そこには見知らぬ青年が立っていた。

「……驚いた。マジで女だったんだ」

青年はじつとアリスを見つめてきた。

「誰？」

アリスは嫌そうに青年から視線を反らせてバリーに聞いた。

「彼はガイというそうだ。商人達と一緒にメルキドからラダトームへ向かう途中だったらしいんだが、俺達を心配して残ってくれた」

「折角ここまで助けたのに、後で迎えに来たら全滅じゃあ、目覚めが悪いからな」

はい、とガイはアリスにコップを渡してきた。

「……何？」

「水だよ、飲めるか？鎮痛剤があるから、何か食った後にでも飲ん

だ方がいい。……もしかして食べそうもない？んー……一応何か食ってから飲んだ方が胃に優しいんだよねあ」

ぶつぶつと何か言いながら、ガイは横においてある籠の中を漁り始めた。

「あ、これこれ。これを湯で溶いて食べばいいかな。ちょっと待つてろよ」

そう言っただけでガイは離れたところにいたクロードの元へ行ってしまった。

「……彼は、口は悪いところがあるが、面倒見が良い。怪我人一人一人に気を使ってくれているんだ」

「そう、なんだ」

アリスは受け取ったコップに視線を落とした。

「バリー」

「なんだ？」

「団長は？」

「……」

アリスが聞くと、バリーは静かに首を振った。

「……そう」

声が震えそうになるのを、アリスは必死に堪えていた。

「えーっと、アリスだったかな。はいこれ」

戻ってきたガイが、アリスに粥が入った皿を差し出した。

「……」

「とにかく食べる。いいな」

押し付けるように渡すと、ガイは他の怪我人にも同じように話しかけ、包帯を替えたりし始めた。

「……先にバリーから貰った果物を食べようと思ってたのに」

食べ物最低限しかないはずだ。けれど、ガイは真つ先にアリスに渡してきた。

「冷めたら美味しくないだろう。先に食ってやれ」

「じゃあ、果物はみんな食べようね」

「おいおい。分けるほど大きくないぞ」

「……そうだね」

少しだけ笑みがこぼれたが、それ以上は笑えなかった。

粥を食べながら、アリスはなんとなく察していた。

商人達は、ドムドローに来て初めて異変に気がついたらしい。それはつまり、途中でドムドローから避難してきた人々に会わなかったということだ。

メルキドからドムドローまでは余程道を外れない限りほぼ同じルートを辿る。だから、避難している人たちと途中で会わなければおかしい。

避難した人たちは、一体何処へ行ってしまったのだろう。

「……無事、だよな」

食が進まず、途中でアリスは食べるのを止めた。

「逃げた人たち、きつと無事だよな」

聞いているのではなく、自分に言い聞かせるように言った。

「……」

バリーは何も言わず、ゆっくりと立ち上がった。

「……すまなかったなアリス」

「え？」

「商人達に、この中に女性がいるということを言っておけば、お前だけでも先にラダトームに行かせる事が出来たはずだ」

護衛団として武装していたアリスは、体中怪我やモンスターの返り血などで汚れていた。それは他の団員も同じだ。衛生上は完全に綺麗にした方が良かったのだが、とにかく先に砂漠から出ることを優先し、応急手当程度で済ませていた。それらの措置まで商人達にさせるのは申し訳ないと、動ける団員達だけでやったので、商人達は誰もアリスが女性だとは気がつかなかったらしい。1人ここに残ったガイのみが、後からアリスが女性だと知らされたのだ。

「そんな、私だけ先に行く事は出来ない。私だって団員だよ。特別扱いされても困る」

「そうは言っても、基本的に護衛団って女はいないしな。つつーか、入らないからな。キツイって聞くし」

いつの間にか戻ってきたガイが、バリーの腕の包帯を替えながら言った。

「覚悟した方がいいかもな。わずかな生き残りで、しかも女だろ。英雄扱いは免れねえよ」

「おい、ガイ」

「それだけじゃない。折角生き残ったつてのに、こいつらも色んな中傷に晒されるぞ」

「ガイ！」

バリーが声を荒げたが、ガイは肩をすくめるような動作を見せただけで、まったく悪びれた様子はない。

「オレは、そうなる前にどうにかしとけて忠告しただけ。……これ以上、身体的にも精神的にもダメージ受ける必要ないでしょ」

ガイは二人だけに聞こえるように言うと、バリーとアリスの肩を軽く叩いてから、二人に聖水を投げて渡した。

「山ほど置いてってくれたんだけどさ、強い奴が撒いた方がモンスター避けになるだろ？見たところ、あんたら二人が一番強そうだから」

じゃあよろしく、とガイはまた他の怪我人の所へ行ってしまった。

「……女、か」

「アリス、気にすることはないぞ」

アリスは聖水を見つめながら、視界に入ってくる自分の髪の毛を鬱陶しそうに手で避けた。

束ねていた髪は、所々焦げていたり、切れていたりして長さがまちまちになっていた。

伸ばしていたのは何でだったけ？とアリスは、焦げた髪の毛を手にとってみた。

「……切ろっかな」

「アリス？」

「切れば、男に見えないこともないよね。クロードと背の高さは同じくらいだし。それに、こんな髪の毛じゃみつともないしね」

アリスは立ち上がると、ナイフはないかと探し始めた。バリーはそんなアリスを慌てて止めようとしたが、そんなバリーにアリスは苦笑した。

「もう一度伸ばすにしても、一度切らないと綺麗に伸びないしね」
「しかし！」

「男のフリ、しといたほうが良いよねきつと。大丈夫、ほら、私背がわりと高い方だし、言わなきゃばれないって」

迷惑をかけたくないのと、特別扱いして欲しくないという気持ちがあった。

ドムドローの護衛団では、女性だからと特別扱いされた覚えはなかった。町の人からは、女性なのに何故？とはよく言われていたが、それは実績により納得させていったし、他の団員も初めは差別に似た視線をアリスに向けていたが、やがてその実力を認めてくれた。

だからアリスは自分が特別だとは思わなかった。まさか、こんな事態になってから、アリスが女性である事による弊害が起こるかも知れないなんて、思いもよらなかったのだ。

「ガイは気にしすぎなんだよ。アリス、別に俺達は大丈夫だから」
「……ううん。面倒くさいことになったら嫌だしね。ラダトームに滞在している間だけだから」

ラダトームへ向かうと言っても、ずっと滞在する気はない。いつかは生まれ育ったドムドローへ戻るつもりだ。

アリスは見つけたナイフを握ると、まだ反対しているバリーを無視して一気に髪を切った。

風に乗ってパラパラと舞う髪を見てみると、ガイが何か言いたげな表情をしていたのが目に入った。

「そろえてやるのか？」
「え？」

「後ろとか見えないだろ？ほら、ナイフを貸してみろ」

言うなりガイは、アリスの腕を掴んで近くを流れる川にまで連れて行った。

「どうしてこんなところまで連れてくの？」

「あそこじゃ皆がいるだろ」

よいしょ、とガイは川岸に座り、アリスにも隣に座るように促した。アリスは仕方なく座ると、ガイはアリスの後ろに移動して髪を触り始めた。

「少し痛んでるな。もうちょっと気にした方がいいんじゃないのか？」

「余計なお世話。……ねえ、ドムドーラの人たちとは」

「会ってない」

アリスからナイフを借りたガイはキツパリ言い切ると、丁寧に髪を切り始めた。

「はつきり言うんだね」

「誤魔化したって仕方がないだろ。会ってないもんは会ってない。

……まあ、状況的に道を間違えたって可能性もあるけどな」

「……だと、いいな」

メルキドへ行きなれない人だと間違える事もある。急いで避難しなければならぬ状況で、混乱が起きて先頭集団が道を誤って、後ろに続く集団もそれに続いてしまったのかもしれない。

「弟、いるんだろ？」

「聞いたの？」

思わず後ろを振り向きそうになったが、ガイにしっかりと頭を抑えられてしまった。

「ああ。勇者ロトの正統な末裔だとかなんとか、ここ1週間であいつらから散々聞いた。本当はお前も一緒に避難しているはずだったとも言ってたな。……お前は、弟を置いて戻ったんだな」

アリスの肩が震えた。しかしガイは構わず続けた。

「戻った結果がこれか。……一緒に避難した方が正解か、それとも

戻ったのが正解なのか」

結果的にアリスは生き残り、弟のアレフは生死不明だ。

「……皆が生き残れるように、戻ったはずなのにな……」

呟いたアリスの声は少し震えていた。

「私、死にに帰ったわけじゃなくて、皆が生き残れるように戻ったんだ。多分、傍から見れば自殺行為に見えるかもしれないけど……だけど、けどこんな……アレフが、皆が生きているかも分からない状態になるんだったら、戻らない方が良かった！」

団員の皆から離れた所為で、皆の前では泣くまいと堪えていた涙が溢れてきた。

「結果なんか、やってみなけりやわからないもんだ。アリスの判断は、オレは間違ってたと思う」

ガイは終わりとばかりに、アリスの肩についた髪の毛を払い始めた。

「……そういえば、その首飾りつてもしかして竜のうろこか？」

「うん。これ、お守りだからって預かって……え?!」

アレフから預かっていた竜のうろこを手についたアリスは、その変貌に驚いた。

綺麗な青緑色をしていたはずのそれは、どす黒く変色しており、所々欠けている。

「どうして……あ!」

その変化に思い当たることがあった。

ドムドーラでの最後の記憶。それは、ドラゴンから炎を浴びせられたところで途切れていた。つまりアリスは炎に焼かれたはずなのだ。それなのに、アリスは火傷を殆どしていなかった。

「ドラゴンの炎から、守ってくれた……?」

「聞いた事があるな。竜のうろこの中には、ドラゴンの炎からも守ってくれるやつがあるって。あまり流通してないから、珍しいらしいけど」

『みんなおそろいです』

つい昨日のように思い出されるユウの照れたような笑い。そして、後で交換しようと言ったアレフの、皆を守るんだという意気込んだ表情。

「ユウ……アレフ……っ」

アリスは震える手で変色した竜のうろこを握り締め、その場に泣き崩れてしまった。

プロローグ 4（終）

アリスが目覚めてから約3週間が経過した。

生き残った中で唯一回復呪文が使えたアリスは、魔力が回復するたびに怪我人に魔法を使い続けた。元々そんなに魔力が強くなかったので、大きな怪我には痛み止め程度しか効かなかったが、それでも限られた物資の中ではかなり重宝されていた。

だが、普段使い慣れていない魔力を使い続けるのは思ったより負担が掛かり、すぐに魔力が尽きてしまい倒れてしまう事もしばしばあった。

「だから、無理をするなど言っているだろう」

また倒れてしまったらしい。目が覚めるとバリーが呆れたような表情をしていた。

「……こんなことなら、もっと魔法の勉強をしとくんだったなあ」

「無理無理。アリスって魔法を使うってタイプじゃないじゃん」

「ガイ、あんたねえ！」

「ガイさん！これって食べられますか？」

「どれどれ？……クロード、お前食えないものばかり見つけてくるよな。捨てて来い」

昔からそこにいたかのように、ガイはすっかり団員達と馴染んでしまっていた。

「おいしそうなんだけどな」

「食うのは構わないが、その後の保障はしねーぞ」

「えーっ！」

ガイとクロードのそんなやり取りに、団員達の顔にようやく笑みが戻ってきた。

初めの1週間は、皆絶望した表情をしていた。けれど、少しずつ回復していくにつれ、ほんの少しだが笑えるようになってきたのだ。故郷を失い、友を失った。そして家族の生死は不明。けれど彼ら

は生きている。ずっと絶望に沈んでいるわけにはいかなかった。

そしてようやく、ラダトームから派遣されてきた兵士が到着した。商人達からだだならぬ状況だと聞き、回復魔法の使える者まで連れてきてくれた。

アリスやクロードの怪我は大した事がないので、他の者から優先的に怪我を見てもらう事になり、明日の早朝にここを出発する事になった。

救護の兵士に連れられてから1ヶ月後、アリスたちはラダトームに到着した。

ラダトームの兵士達が来るより前に、アリスは団員達にアリスが女性だということを黙っているようにお願いしていたので、誰もドムドーラの護衛団に女性がいるとは思わなかった。

アリスが男のフリをすることに団員達は反発したのだが、アリスも反発されたからといって意志を変える気はなく、最終的には団員達も説得を諦めていた。

ラダトームに着くなり、団員達には郊外に家が貸し出された。そこでしばらくは仮住まいをしてよいという事になってはいるが、一定期間が過ぎてからどうするかは、彼らの意思に任せるという事になった。

ラダトーム到着の翌日、生き残った団員は全員、正装して王と謁見した。ドムドーラでの出来事の報告や、しばらくは援助が出ることなどの話をした。

そして最後にメルキドへ搜索隊が出ることを告げられた。

ドムドーラの護衛団の中からも、搜索隊として数名が行く事になった。アリスもちろん志願したのだが、男のフリを続けるならば行くのは無理だと団員達に止められ、仕方なく待つ事になった。

「そっか。アリスは行けなかったんだな」

搜索隊が出発した次の日、団員達の仮住まいへガイが尋ねてきた。

ガイは町にいる間は宿屋に泊まっていた。アリスたちと会う前に一緒に行動していた商人達はラダトームに着くなり解散していて、すでにそれぞれの目的へ向かって行ったのだと、ラダトームに残った商人から聞いたらしい。ガイも元々ラダトームまでの同行のつもりだったそうなので、そんなもんだよ、と笑った。

「他の奴らに遅れを取ったけどな。オレも町を出るつもりだ」
「そっか……」

ガイにはお礼を言っても言いたりないぐらいだ。彼がああ野営に残らなければ、元気を取り戻せなかった団員もいたはずなのだから彼の性格によって、笑顔を取り戻した団員も少なくはない。

「本当、ありがとう」

「いいって。ほら、王様から謝礼も貰ったしね」
そう言うガイだが、謝礼が目当てではなかった事ぐらいアリスには分かっていた。

謝礼が目当てなら、あんなモンスターに襲われたらひとたりもないような場所にわざわざ残ったりはしない。これは彼なりのテレ隠しのだろう。

「……あーあ。なんかオレ、バリーに結構怒られてたんだよな。最後になんか悪戯してこうかな」

何でもズケズケ言ってしまうガイに、バリーはよく注意をしていた。ガイの行動は皆の元気を取り戻す元にはなっていたが、あまりにも目に余る言動には、バリーは容赦なく拳骨をおまいしていた。しかし、その行動さえも笑を取るのだから、もしかしたらガイはその事まで考えて、真面目なバリーをからかっていたのかもしれない。

「ガイはからかいすぎなんだよ」

笑うアリスの頭を、ガイはくしゃくしゃに撫でた。

「じゃあな。ま、そのうち皆にまた会いに来るから」

「え？あ、もう行くの？」

「ああ。もともと長居はするつもりはなかったからな」

尋ねてきたのは、別れの挨拶をするためだったらしい。

「しかし、お前本当にずっと男のフリをするつもりなのかよ」

「……ガイが最初に言い出したんでしょ」

ワザと機嫌悪そうに頬を膨らますと、ガイは悪い悪いと言いながら笑った。

「まあ、そうしてると男か女か分からないしなお前。クロードと並んでどっちが女？って聞かれたら、オレ、クロードの方を選んじまいそうだ」

「……それは……実は私もちょっと思ったりしないでもないんだけど」

まだ成長途中であるが、それを抜きにしても中性的な面持ちのクロードは、今はまだ女性ではわりと背が高い方のアリスと同じくらいの身長だ。そんな外見がコンプレックスらしい彼は、強くなつて男らしくなりたいと護衛団に入つたのだ。

しかし残念ながら、まだまだクロードは強さもアリスには届かず、ガイの言うとおり身なりを整えてしまえば女性に見えなくもない。

「それ、絶対にクロードに言うなよ。あいつ傷つくからなあ」

「ガイより付き合いが長いんだから分かつてるって」

「まあでも、あいつまだ成長期だからな。次にあつたら身長抜かれてそうだ」

「そうだよ。クロードはまだまだしか14歳だし。ガイは幾つだっけ？」

「お前と同じ18歳」

「……見えないね」

老けてるね、とついでにため息混じりに言うと、ガイに額をどつかれた。

そんな他愛のないやり取りを一通りした後、ガイは他の団員達にも挨拶をして回った。一番懐いていたクロードはちよつと泣きそうになつていて、バリーは最後の最後まで説教をしていた。

団員達は皆、彼に感謝していた。だから、誰もが彼との別れを惜

しみ、何も礼が出来なかった事を詫びていたが、ガイはまったく気にした様子もなく、いつも通り笑っていた。

そして、ガイは皆に見送られてラダトームを後にした。

搜索隊が戻ってきたのは、それから更に3ヶ月が経過した後だった。

思い当たる場所などを調べつくしたのだが、メルキドにはドムドーラの人たちがたどり着いた形跡はまったくなかった。調査をさらに重ねた結果、ドムドーラが襲撃されたその晩に、メルキドから山脈を挟んだ北側の方角で、モンスターの群れが飛び去る様子を目撃した者がいたことが分かった。

時間が許す限り搜索を続けたのだが、ついにドムドーラの人々を発見する事は叶わなかった。

『メルキドへ向かう途中道を誤り、モンスターに襲われて全滅』

これが、アリスたちに正式結果として報告された内容だった。

ドムドーラ襲撃から約1年後。王宮がモンスターの群れに襲われた。

事前に察知した王宮所属の魔法使いにより、殆どの者は避難をする事が出来たが、兵士の約半分は失われてしまい、王の1人娘であるローラ姫が攫われた。

ドムドーラでの生き残りの団員達も、王宮を守る為に奮闘した。ドムドーラの二の舞にはしたくないと、全力で戦い続けたのだが、結局犠牲者を出す結果となってしまった。

戦いの最中、誰かが言っていた。

何故こんな事態になってもロトの勇者は現れないのだ、と。

王宮の兵士だっただろうか。モンスターの咆哮にかき消されながらのか細い声だったが、それはアリスの耳から離れなかった。この戦いで、またアリスはドムドーラの仲間を数名失う事になった。

* *

*

「アリス、本当に行くのか？」

支度を整えたアリスに、バリーが心配そうに声をかけて来た。

「うん。これでも一応、私も王が求めているロトの末裔だからね」

数年前も、ラダートームはモンスターの襲撃を受けた事があったという。その時は、平和の象徴である光の玉を奪われた以外の被害はなかったらしい。しかしその後、モンスターがはびこる世界へと変貌し、ついに1つの町を滅ぼすまでになってしまった。

そんな王に、つい先日予言者が言ったという。

『ロトの血を引く者が現れて、竜王を倒す』

王はこの言葉を頼りに、ロトの末裔を捜し求めている。

「……実はロトの血って言っても、1つの家系じゃないから、探せば結構いるようだけれどね」

ロトの末裔は1人だけではない。それは、アリスとアレフという姉弟から分かるとおり、他の町にも末裔はいる。ただし、ロトのしるしを受け継いだ正統な家系はアリスの家だけだ。

我こそは、と名乗りを上げる者もいるが、それがロトの末裔だという証明は実はない。王にも、本当の末裔が誰なのかを知る手段はないのだ。だから、自称でもなんでも、ロトの末裔と名乗るものな

ら片っ端から信じる事に行っているらしい。

おそらく、王が本当に求めている勇者ロトはアリスの弟のアレフなのだろう。彼に秘められていた才能は、まだ未発達ながら計り知れなかった。

だが、アレフは未だに見つかっていない。

「アレフの名を借りるのか」

「……うん」

他に偽名を思いつけなかった。アリスにとって、ロトの勇者はアレフなのだ。

ドムドーラの人々が全滅したと報告を受けたとき、アリスはそれを信じられなかった。

だが搜索隊に参加した団員達が見聞きしたことを聞き、調査結果は信じるに値するような事柄であると分かっていたアリスは、しばらくの間何も食べられない状態にまでなってしまった。

だが、こんな状態をアレフは望んでいないはずだと、実際に目に見ていないから、まだどこかで生きているかもしれないのだと、アリスは自分に言い聞かせた。

そんな中でのラダトームへの襲撃。ここでまた仲間を失ったアリスは、王が求めている勇者ロトの末裔として旅立つ事を決意したのだ。

自分が勇者ではない事は、アリス自身がよく知っていた。でも、このままここでくすぶり続けるのは、ドムドーラの誇りある護衛団として耐えられなかった。

他の護衛団たちは、今はラダトームを護衛することで役目を果たしていたが、男と偽ったアリスはラダトームの護衛団として常駐できず、また町から出るにしても行く当てもなく、ひたすら皆の帰りを待つしかなかった。

でも、これedyouやく自分も動き出せる。

ロトの末裔として名乗りを上げれば、どこの町へ行ってもロトの末裔として頼られる。ただの旅人ではなく、人々を守る戦士として

見られるのだ。

出来るだけモンスターから人々を守る。その意志は昔から変わらない。

「人々を守る為に行くんだ」

攫われたというローラ姫。どんな姫なのかは知らないが、助け出せるなら助け出してあげたい。大事な人がいなくなるのが悲しいのは、嫌というほど味わったから。

あの絶望を、悲しみを、アリスは少しでもなくしたかった。

勇者ロトが、そして父が守ったように、自分に手が届く出来る範囲でもいいから、人々を守る。

「……でも、勇者がいない」

この1年間で何度も切りそろえた短い髪の毛を触りながら、アリスは呟いた。

出来る事は限られる。それは嫌というほど分かっていた。

だから人々は勇者を求めていた。竜王を倒す事が出来るほどの力を持った勇者の末裔を。

しかし、ドムドーラの生き残りの者だけが知っていた。

勇者は、この世界にはもういない。

だがアリスだけは、アレフの生存を信じようとしていた。

「アレフもきつと生きているはず。出来る事なら、アレフを探し出して、一緒に竜王を倒す！」

失う悲しみはもう沢山だ。

様々な思いを胸に、アリスはアレフとして旅立つのであった。

第一章 旅立ち 1

アリスが最初に王と謁見したのは、ドムドーラの生き残りの護衛団の一員としてだった。

しかし主に会話はバリーが代表でこなし、アリスたちは後ろに控えて頭を垂れているだけだったので、今回が初めて王とまともに話す事になる。

「……ねえクロード、一応身なりは整えてきたつもりなんだけど、大丈夫かな？」

軽装ではないが、動き易さと防御力はそれなりにある物を身につけているアリスだったが、王と謁見するとなれば不恰好で会うわけにもいかないので、これで大丈夫なのかと少し不安になっていた。「大丈夫ですよ。僕なんか未だにコレ、似合わないって言われ続けてますし」

クロードは苦笑しながら、身につけている鉄の鎧を指差した。

ドムドーラの団員のほとんどは、今はラダトームの王宮で兵士として働いている。アリスの後輩のクロードも、若いながらも実力を認められており、他の新人兵士とは比べ物にならないほど力を発揮しているらしい。

ドムドーラの護衛団は荒削りながらも実戦が多かったためか、他の町の護衛団よりも能力が秀でているようで、初めはよそ者だの運良く生き残っただけだのと言われてきたが、今では他の兵士の見本になるような者も多い。ドムドーラの団員の中でも比較的新人である若いクロードでさえ、ラダトームの一般的な兵士より強いのだ。

ただ、クロードは年齢の所為もあるが、中性的な外見と、話しかけたり絡んだりすると面白いくらいに反応を返してくる所為で、王宮に勤めている女性達からかわれることが多いらしい。それが気に食わないとアリスによく愚痴をこぼしている。

「訓練中に可愛いとか言われるんですよ。なんかおかしいですよね？」

たくましくなりたいと常日頃言い続けているクロードには悪いが、未だにクロードはアリスと同じくらいの身長しかない。成長期はまだ先なのか、この1年であり身長が伸びなかったようだ。

だが、このクロードにとつてのコンプレックスともいえる外見が、今のアリスにはありがたかった。

護衛団は基本的に男性のみで構成されている。女性が入ってはいけないというわけではないのだが、過酷な仕事内容に女性がついていけない。

アリスはそんな護衛団に所属していた。女性ながらも、団員の中でもかなりの実力を持っていた。

しかし女性が護衛団にいるということで、生き残った団員達が世間からどんな目で見られるか、どんな扱いを受けるのかを考え、アリスは女性であるということを隠していた。世の中には下種な考えをするものも多い。精神的にも肉体的にもダメージを受けた団員達に、これ以上の負担を増やしたくなかったのだ。

「……可愛いは別として、クロードが私と同じような背格好で助かったよ。背が高めとはいえ、それは女にしてみれば、って事だし。同じ年の男の人ぐらい高いわけじゃないしね」

ロトの末裔として王に会う。それには一つ問題があった。

ドムドーラの生き残りの団員として、アリスはすでに一度謁見している。

アリスの父親は過去に護衛団の団長を勤めていた。護衛団の団長はその町を守る代表者であるため、その身分を王宮に報告する義務がある。つまり、アリスの父親が団長であったという時点で、王宮にロトの末裔であるという記録が残されている。アリスが元団長の子供であるという事は、自己申告だけではなく他の団員達からの証言ももらえるので、間違いなくロトの末裔だと認められるだろう。

予言により、王はロトの末裔を求めている。ロトの末裔である者

は申告する事により、王宮から正式にロトの末裔として後盾が出るのだ。扱いは王宮の兵士と同じか、むしろそれ以上だろう。金銭面での援助は、偽者のロトの末裔が現れることを考慮してか殆どないと言っても過言ではないのだが、どこへ行っても信頼されるという意味で王の後盾の価値は大きい。

それゆえ、その後盾を利用しようとするものも現れると危惧されている。その為に後盾の証を手に入れて逃亡させないため、定期的に王への報告が義務付けられており、それを怠ればロトの末裔としての扱いは全て剥奪する事になっている。

アリスには何もない。他の町にあてがあるわけでもない。そんな彼女が単独で旅を決行するとしても、行く先々で何かと不便が生じる。身分の証明する何かがなければ、他の町で不審者扱いされても文句は言えないのだ。

だからロトの末裔として王に公認してもらいたい。

しかしそこで障害となるのが、アリスが女性だということだった。男性としてラダトームにいるアリスが、女性として現れるわけにはいかない。たかが性別を偽っただけでも、もしかしたら王を謀ったと捕らえられる可能性もある。それに男性として暮らす上で名前もアリスでは怪しまれるからと、ラダトームに来てからは表面上は弟の『アレフ』の名前を借りて過ごしているのだ。

けれど、アリスをこれ以上男性だといいつけるのにはそろそろ限界があった。いくら髪を切ろうが、体を鍛えて女性らしさを誤魔化そうとしても、年を重ねるごとに誤魔化しが効かなくなる。アリスは19歳になっていたが、19歳の男性だと言い張るには、声が高すぎるし外見も年相応の男性らしさがない。

ここでクロードの存在がアリスにとって幸運となった。

彼は15歳。まだまだ成長段階で、アリスと背丈があまり変わらない。

アリスが男性としていくなれば、実際の年齢では無理があるが、クロードと同じ年齢であるとするならば、疑われる可能性が低くな

るのだ。

しかも、クロードは王宮の兵士として今ではかなり知られている存在だった。ドムドーラの生き残りということで、一般の兵士よりも認知度が高い。

すでにクロードという中性的な存在が受け入れられている王宮でなら、同じ15歳だといえ、疑われる事は無いだろう。

アリスはクロードに理由を話し、年齢も誤魔化す事を伝えて協力を仰いだ。クロードが気にしていることを利用する事になるので気が引けたのだが、クロードは、こんな外見でも役に立つ事があるんですね、と喜んで協力を引き受けてくれたのだった。

そして同じドムドーラの生き残りである彼が直接紹介すれば、アリスへの素性に関しての信用度も高くなる。

案の定、王宮内をクロードと並んで歩くアリスを見て、女性なのかと問いかけてくる者はいなかった。誰かと聞かれても「同じ生き残りで同期なんです」という答えにすんなり納得してくれたり、女性からは、新たな兵士志願者だと思われる何故か喜ばれてしまった。「……先輩、女の人に声をかけられてもついていけないくださいね。からかわれますし、僕なんかこの前なんてメイド服を着させられそうにもなりました」

ここの女性は怖いんですよ、と真面目な顔をしてクロードに注意されてしまい、アリスは少し緊張が解け、思わず笑ってしまった。

「よくまいった。クロードから報告を受けている。確かそなたは、クロードと同じドムドーラの護衛団だったのだな」

王との謁見は、アリスたちの他には誰もいなかった。

他の自称ロトの末裔は今日はいないらしい。王宮に着くと、アリスたちは直に王と謁見する事になった。

「はい。彼……アレフは私の同僚であり、前団長のご子息です」

クロードはアリスよりも緊張した面持ちだが、はつきりとした声

で答えた。

「アレフと申します。ロトの末裔として参りました」

深々と頭を下げ、アリスは王の前で跪いた。

「よい。頭を上げよ。……随分と若いな。年は？」

「クロードと同じ、15歳です」

その答えに、王は納得したように頷いた。

「そうか。なるほど。ドムドールの護衛団の若者には優秀な者が多かったと聞いておる。そなたもきつと強いのだろうな」

疑問を持たれることもなく、すんなり納得されてアリスは心の中で安堵のため息をついた。

「お褒めいただき、ありがとうございます」

「優秀な者はラダトームの兵士として欲しいところだが、そなたは勇者ロトの血を引きし者。ロトの末裔として、旅立つ為に来たのであろう。……わしは、そなたのような者が来るのを待つておった」

これまで来たロトの末裔のどの人物よりも、アリスは確実なロトの末裔として認識されたようだ。

王は淡々と話し始めた。それはロトの末裔であるという者たち全員に話している内容と同じものだろう。

昔、勇者ロトが神から授けられた光の玉を使い、世界を覆っていた闇を照らして魔物たちを封じ込めた。だがその光の玉を竜王が奪ったため、このままでは再び世界が闇に飲み込まれ、やがて滅んでしまうだろう、と。

ロトの末裔に求めている事は、竜王を倒す事だった。これまで誰も竜王には敵わなかったが、ロトの血を引くものならば希望があるのだと。

アリスは黙ったまま王の話に耳を傾けていた。

「ロトの末裔の勇者アレフよ、竜王を倒し、光の玉を取り戻すのだ。旅の資金には足りないかもしれないが、資金を授ける。見事竜王を倒し、光の玉を取り戻したのなら、相応の褒美を与える事を約束する」

再び頭を深く下げたアリスは、王に見えないように唇を噛み締めた。

勇者アレフ。

この言葉を聞くべき人物はここにはいない。アリスは硬く目を瞑りながら、今は自分がアレフなのだとかの中で言い聞かせた。

「……私は、自分の成すべき事をするだけです」

「すぐにそなたにロトの末裔だと認めた証を作らせる。しばらく王宮内で待つておれ」

ラダトームの王の紋章が入った証は、ロトの末裔だと王が認めたものに渡されるものだ。こんな確かな身分証明書は他にはない。

偽造防止などのため、王が認めた後に作る作業にかかるようだ。いつ出来上がるかは分からないので、その間は王宮内を自由に歩いてよいと言われた。

失礼します。とアリスはクロードを連れて部屋を出た。

「アリ……じゃなかった、アレフ。待っている間、久しぶりに剣の稽古に付き合ってくださいませんか？」

一気に緊張が取れたのか、クロードはアリスの腕を引っ張り、少しはしゃぎながら兵士達の宿舎へ案内した。

「こっちは男しかいないからむさ苦しいですよ」

兵士達の宿舎には稽古場もあった。今も稽古中なのか、威勢のいい声が響いてきている。

「なんだ、じゃあ護衛団とあまり変わらないんだね」

「そういえばそうですね。アレフ……うーん、未だに呼びなれないなあ。先輩でいいですよ。うん」

偽名とはいえ呼び捨てに抵抗があるらしいクロードは、アレフと呼ぶことを早々に止めてしまった。

「まあ大丈夫……かな？私の方が先に入団したとも言え、クロードが先輩と呼んでもおかしくないか」

王への旅の報告は義務なので、今後も何度か王宮に足を運ぶ事になる。団員繋がりで見知りも出来るだろう。とにかく偽装は徹底

しなければならいので、他の団員達にも気をつけて欲しいと何度もお願いしていた。

「先輩。私、は止めた方がいいかも」

「え？」

「謁見とか、そういう場合ならいいと思うんですけど、普段は変えた方がいいかもですよ」

「あ、そっか」

皆には徹底して気をつけて欲しいとお願いしているのに、アリス自身が女性の一般的な一人称を使い続けては、もしかしたらボロが出てしまうかもしれない。

「えーっと……じゃあ、クロードと同じで『僕』って言えばいいのかな」

クロードの同僚で同い年という事になったので、同じように合わせる事にした。小さい事だが、少しでも疑われるような要因はなかった方がいいだろう。

そんなやり取りをしている内に稽古場に到着した。今日は他のドムドーラでの同僚達は出払っているようで、稽古場を覗いても、知っている顔はいなかった。

「あれ？クロード、お前、今日は非番じゃなかったのか？せっかくの休みなんだからゆっくり休んでいろよ。じゃないと、新人がまた訓練してくれて押しかけてくるぞ」

休憩中らしい兵士がクロードに声をかけて来た。

「午後はゆっくりするつもりです。今日は護衛団での同僚を王に紹介してきたんです」

「ああ、そういえばそんなような事を言っていたな。……そのガキがそっか？」

ちらりとアリスをみた兵士は、馬鹿にしたように鼻で笑った。

「ドムドーラの生き残りの護衛団は殆ど兵士になったというのに、その口トの末裔様はこれまでのん気にいたということか」

「なっ?!先輩はのん気になってしていません!」

「どうかな。確かにドムドーラの護衛団は強いが、それは王宮の兵士になった者だけで、残りの兵士にならなかった者たちは唯の運が良かった者たちなのだろう？だから兵士に志願しない。このガキもロトの末裔だから来ただけで、王が求めなければずっと町で自堕落に暮らしていたんだろ。王から家も金も支給されてるんだろ？いいよなあ、何もなくても暮らしていける奴らは」

（……？なんだ、コイツは）

アリスは兵士の言葉を黙ったまま聞いていた。その代りともいうように、クロードは今にも兵士に掴みかかるうとする勢いだったので、アリスはそのクロードの手を止めさせた。

「離して下さい！前もこうやって僕らを馬鹿にしたんです！！」

完全に頭に血が昇ったクロードにため息をつくと、軽くクロードの頭を叩いてから前に進み出た。

「……これ以上言ってもクロードが怒るだけです。単刀直入に言うと、私の実力が知りたいんですよね？」

「え？どうということですか先輩？」

キョトンとしているクロードの手を離すと、アリスは視線を兵士に向けた。

「多分、私を怒らせて勝負を仕掛けさせようとしたんじゃないかな。残念ながら私ではなくクロードが怒ったわけだけだ」

わざとらしい挑発だ。明らかに相手をイラつかせるような言葉を選んで言っていたのだ。

（クロードにいたわりの言葉をかけた後の言葉にしては、かなり不自然だったしね……でも）

「ふーん。つまらんな。クロードみたく、思いつきり怒ってもらった方が面白いのに。けどまあ、そういうことだから、俺と手合わせ願おうか」

「わざと言ったにせよ、団員達を侮辱するような言葉は聞き捨てならない」

つまらないと言っているわりには、面白そうにアリスを見下ろし

てくるその兵士に、アリスは低い声で言った。

彼が本気で言ったわけではないだろうけれど、彼の言うような印象を持つ者がいるかもしれないと思うと怒りが湧いてくる。

死線を越えた仲間である団員を侮辱する言葉は許せなかった。

「……へえ、結構出来そうだなお前」

兵士の言葉を見、アリスは無言で間合いをとると、腰に下げていた剣の柄を握った。

第一章 旅立ち2

兵士は、ドムドーラの護衛団は実力があると知りつつ挑発してきただけあり、剣の腕は素晴らしかった。基本動作がしっかり染み付いているのだろう動きは、無駄が一切見られない。

しかし、勝負にはアリスが勝った。

実力は申し分ないだろう。きっと他の者に教える立場であるに違いない。

ラダトーム周辺は元々強い魔法で守られている事もあり、滅多にモンスターが近づく事はない。海を隔てた先に竜王がいる島があるため、王宮には名のある強力な結界魔法を使える魔法使い達が、常に魔法を発動しているのだ。そのため、強いモンスターは近寄る事さえ出来ない。しかし、逆に弱いモンスターには影響が薄いらしく、ラダトーム周辺にいるモンスターは主に魔力の隙間に潜り込めるような弱いモンスターしかないのだ。

その結果、ラダトームの兵士は強いことは強いのだが、モンスター相手など臨機応変が求められる実戦経験が乏しかった。

ラダトームが襲撃された時は、モンスター側が全力で結界魔法を妨害していたのだ。人間たちの中心であるラダトームへの襲撃がこれまで二度しかないのは、結界を妨害するという行為がモンスター側にとって大きな労力を必要とするのだろう。頻繁に襲撃がないという安心感はあるが、それが壊された時の被害は大きい。

その為に王宮の兵士は訓練に勤しんでいるわけなのだが、やはりというか実戦不足だ。ほぼ訓練のみで染み付いた動きだけでは、ドムドーラの護衛団の動きにはついていけない。だから実戦経験に富んだドムドーラの護衛団であつたクロード達がとても重宝されているのだろう。

今アリスと勝負した兵士も、基本的な動作は完璧だった。しかし、アリスの実戦向きの動きへの反応が鈍く、最終的にはアリスが勝利

したのだ。

（勝った……けど、何か手ごたえが変な気がした）

アリスは息を整えながら、握った剣の柄をジッと見つめて首を少し傾げていた。

確かにアリスが勝ったのだが、もしかしたら彼はアリスの実力を見たかっただけで、本来の力は出していないのかもしれない。

型どおりすぎる動きだった。不自然すぎるほどに。

初めはアリスも相手の動向を探るため基本的な動きで対応していたのだが、すぐに型が完璧であると判断したため、隙をついたり、型どおりでは対応し難い動きで相手を追い詰めた。

そんなアリスに対し、彼は最後まで型どおりで完璧な動きで返してきた。

（……この人は）

多分、いや、多分ではなく本来ならもつと強いのだろう。

「勿体無いな。これだけの實力を持ちながら、何故ラダトームの兵士に志願しなかった」

剣を戻したアリスに向かって、勝負を仕掛けた兵士は残念そうに言ってきた。

「……私が所属したい場所は、ドムドーラの護衛団だけです」

「なるほど。こだわりがあるんだな」

ニヤリと笑った兵士は、アリスとクロードを交互に見た。

「お前らが同じ年齢とは思えないな。實力は二人とも年齢を超えていると思うが……お前、名はなんと言う？ちなみに俺はトーマス」

「アレフだ」

同じ年齢と思えないといわれてギクリとしたが、アリスは勤めて冷静に答えた。

「アレフか。覚えておくよ。……さっきは悪かったな。それにしても、クロードはガキっぽいが、アレフは落ち着いているな。自分のことを『私』と丁寧に言うところを見ると、年齢で馬鹿にされないようにしているのか」

クロードと同じ年齢に思えないというのは、年が若いから馬鹿にされないために振舞っているからだと解釈されたようだ。

(……クロードが言っていた事が早速出てきた)

聞いた側の捉え方次第なのだろうが、クロードと同年代の男が使うには、やはり気になってしまっ一人称なのだろうか。

(そんなに気になるものなのかな……たかが私って言うただけなのに)

「?どうしたアレフ」

「え?あ、えっと。変なら『僕』に戻そうかと思って」

言い慣れない言葉だが、確かに男性のフリをするならばそこから変えた方が良さそうだった。

「そうだな。無理して『私』なんて使わないほうがいいだろうな。

お前らは下手したら女に見えないこともないし、間違われるぞ」

「そうですね」

実際に女ですけどね、と思いつながらアリスは笑って誤魔化したけど、クロードはあからさまに不機嫌な表情をした。あ、と思ったアリスはトーマスの襟元を掴んで顔を引き寄せた。

「……僕は気にしないけど、クロードは女っぽいか気にするからあまり言わないでくれませんか」

クロードに聞こえないように耳打ちすると、トーマスは首を傾げた。

「お前は気にならないのか?」

「気にすることなのか?」

男だという前提で女に見えないこともないとからかわれただけで、別に女とバレたワケでも無さそうだしと、アリスはまったく気にしていなかった。

「そう、気にしなきゃいいんだよ。クロードもアレフを見習って。いちいち気にしているからかわれるんだぞ」

護衛団の時は、団員としては珍しい女性のアリスがいたからクロードの外見でからかわれる事はなかったのだが、こちらでは結構か

らかいの的になっているようだ。本人も外見を気にしている所為もあるからつい反応を返してしまう。反応が良ければからかう方はからかいがあるというものだ。

人によつてはクロードに実力では叶わないから、こういった陰口で憂さ晴らしをしているのかもしれないが。

「アレフ様はここにいらっしゃいますか？王より頼まれたものが出来上がったので持って参りました」

しばらく話しこんでいると、稽古場の入り口から魔法使いらしい人物に名を呼ばれた。どうやらロトの末裔として発行される証が出来上がったらしい。慌てたアリスは急いでその人物の元へ走つていった。

「すみません。もしかしてずっと探されてましたか？」

「いいえ。兵士から、それらしき人物が宿舎へ向かったと聞いたので。それよりも、これが王が認めた者に渡しているものです。魔力により王の紋章が刻まれているので、けして失くしたり、他の者へ渡したりしないでください」

そう言われて渡されたのは指輪だった。中央に王の紋章が刻まれているほかは、なんの変哲もない指輪だ。

「勇者ロトの仲間が身につけていたとされる指輪を元に作られたものです。ロトの末裔が身につけるのだから、と王が考案されたのです」

本物ではないが、ラダトームに伝わるロトの仲間が身につけていたとされている指輪のレプリカらしい。ロトの末裔なのだから、それに由来した物にロトの末裔であると王が認めた証をつけたかったのだろう。

アリスはお礼を魔法使いに言つた後に指輪を受け取ると、指に嵌めてみた。

王の紋章以外にも指輪自体に独特の魔法がかかっているようで、身につけた者のサイズに合うように変化するらしい。見た目は大きそうだった指輪だが、嵌めてみるとサイズがピッタリになった。

「……アレフ様。どうかお願いがあります」

指輪を嵌めたのを確認してから、魔法使いは神妙な面持ちでアリスに頭を下げた。

「王は竜王の事のみ言われたと思いますが、それよりもなによりローラ姫をどうかお救いください。王妃が亡くなられて以来、ローラ姫が王の心の支えになっていたのです。□では何もおっしゃられませんが、心の中では苦しんでおられます」

竜王よりもローラ姫救出を優先して欲しいという魔法使いに、アリスは驚いて目を丸くした。

「王の心労は私たちには計り知れないと思います。それよりも、その、いいのですか？王宮の魔法使いがそのような……」

「分かっております。世界の為には何よりも竜王を倒す事が先決。

……分かってはいるのですが、王が隠し続けている苦しみを和らげて差し上げたいのです。それにローラ姫は我々王宮の者達にとっても心の支え、一日も早く戻って欲しいのです」

ローラ姫というのは、ただ単に王族というだけでなく、王宮にいる者たちにとつての支えでもあったらしい。

（ローラ姫……か。王にとつても、きつとこの人や他の人にとつても大切な人なんだろうな）

「……分かりました。ロトの末裔として旅立った者は私の他にもいるのでしょうか？でしたら、私はローラ姫救出を優先しましょう」

竜王を倒す事を目的としてはいるのだが、それよりもアリスは人々の安全を守る事、そして大切な人を守るという事を優先したいと考えていた。

「ありがとうございます。やはりアレフ様ならば快く引き受けてくださると思っていました」

「買いかぶりすぎですよ。他のロトの末裔の方には？」

アリスが聞くと、魔法使いは小さく首を振った。

「素性が確実にあきらかな方で、実力が有りそうな方はアレフ様が初めてだったのです。実は私は、貴方のお父上とお会いした事が何

度があるんですよ。……面影がありますが、なによりその意志の強い瞳がよく似ていらつしやる」

じつと凝視されたアリスが思わず顔を背けると、それをテレた所為だと思われたのか、魔法使いは笑いかけてきた。

「それでは、私は失礼します」

深く頭を下げた魔法使いは、そのまま稽古場から去っていった。

「ほー、それがロトの末裔に渡されてる王の証か」

いきなりアリスの手を握ると、トーマスはマジマジと指輪を見た。

「た、隊長！先輩の手を離して下さい！」

クロードが慌てたようにトーマスの手を引っ張った。

「ん？ああ、いきなり悪かったな」

「いや、別に気にしていないけど。……隊長？」

兵士の中で隊長と呼ばれる人物は数えるほどしかない。ラダトムが襲撃された後、損害の多さから内部で大規模な移動が行われ、今では隊長と呼ばれる10人の下に、それぞれ兵士が配属されている。

アリスは改めてトーマスを見上げた。

隊長と呼ばれるからには、兵士の中でも実力と家柄が求められる。確かにトーマスは強かった。自画自賛ではないが、アリスの剣の実力はドムドーラの護衛団の中においても高い。父譲りの素質と、日々の努力、そして実戦により幼い頃から鍛えてきたのだ。だからたとえアリスに負けたとはいえ、先ほどは実力を十分に出していなかったようだったので、本来の力はもっと強いのだろう。

「……随分、若い隊長なんですね」

実力はあるだろうが、トーマスはまだ若い。

アリスよりは年上だろうが、まだ30歳には届いていないだろう。護衛団でもそうなのだが、長となるには、実力もだが年齢も関係してくる。

「まあね。隊長の中じゃ俺が一番若いかな。襲撃の後に再編成された中での大抜擢。……っていつても、一番下の隊だな」

クロードが、ここは10番隊なんですよ、と耳打ちして教えてくれた。

「だからって一番弱い隊じゃないんだぞ。むしろ期待の新人アイドルがいるからな、めきめき強くなってる」

「……」

クロードがトーマスを睨むが、トーマスは面白そうに笑うだけだった。

「一番弱いのは2番隊だな。そうそう、その2番隊にはお前ら二人は絶対にかかわらない方がいいし、声をかけられてもついていくなよ」

似たようなことをさっきも言われたな、とアリスがクロードの顔を見ると、思いつきり青ざめた表情をしていた。

「え……クロード、一体どうしたの？」

「危なかったよな。俺がお前の指導係じゃなかったら、危うくクロードは2番隊になるところだったんだもん」

会話が見えなかったので、アリスがクロードをジッと見つめると、クロードは嫌そうに口を開いた。

「……2番隊の隊長の趣味なんですよ。若くて、可愛い男」

「へ？」

「大丈夫。クロードはオレ達10番隊がちゃんと守ってやってるから。まあ、見てみるぐらいはいいんじゃない？すごいぞー。顔だけはいい奴らが勢ぞろい。給料も2番隊は隊長の懐からプラスされてるって言うし、まさにハーレム」

「……？どういうこと？」

「先輩！僕、何もされてませんから！！本当に！！逃げ切ってますから！！」

「だから、何が」

「組織とかにある影っていうか、まあなんつーか嫌な部分を見ちまったよなあ。ま、アレフも気をつけることだ。2番隊の隊長は家柄だけはメチャクチャいいから、世間知らずはうっかり騙されるだろ

うからな」

アリスにはさっぱり意味が分からなかったが、クロードがかなり毛嫌いしているようなので、2番隊とやらには注意するようにする事にした。

「そうだ。たしか、ロトの末裔として扱われるには王に報告するのが義務なんだろう？ということは、ちよくちよく戻って来るんだよな」

「ちよくちよく、というわけではないけれど、戻ってきますよ」

「じゃあ、戻ってきたら俺の隊の宿舎に泊まっていけよ。練習相手がいるのはありがたいんでね」

うちはタダで泊まれるぞ、とトーマスは言ってくれたが、流石にそれは女とばれる心配があるため、町で借りている家に戻りますから、と辞退した。

第一章 旅立ち3

ラダトームを出発する前に、アリスは町の武器・防具屋へ向かった。

その店では護衛団の仲間のバリーが働いている。彼は片腕を失ったため兵士を諦めたが、実家が武器屋だったので武器の知識にかなり長けており、働き始めてまだ1年も経っていないが、店の殆どを任されるまでになっていた。

「いらつしやい。……といっても、今はお前に売れるようないい物はあまりないな」

アリスが訪ねると、バリーは笑顔で迎えてくれた。

「相変わらず、いい品はあまり手に入らないんだね」

「まあな。この店に流れてくるものといえばこんなものぐらいだ」

竹ざおやこんぼうを見せながら、バリーは肩をすくめた。

ラダトームが襲撃された時に兵士達の武器や防具が大量に消費され、まだ使えそうな物でも壊れた箇所の修繕をする必要もあったことから、流通していた主な武器や防具などは王宮に優先的に回された。その結果、町の店には滅多に強い武器や防具が回ってこない。粗悪品やらが回される事もしばしばだ。

バリーはそんな中でも、旅の商人達から買い付けたり、回されてくる弱い武器防具の中でもよい物を見つけ出してくる。

アリスが現在愛用している剣も、バリーが旅の商人から買い付けてきたものを回してくれたものだ。中々頑丈でとても重宝している「買いに来たわけじゃないんだろ？」

「うん。これから出発しようと思って、挨拶に来た」

そうか、とバリーは少し寂しそうにしながらも、アリスが決めたことだからな、とすぐに笑顔で言ってくれた。

「で、これから何処へ行くんだ？」

「東か北か。どちらかで迷っている。……本当は真っ先にドムドー

ラへ行きたいところだったんだけど、今は橋の復旧工事をしているからね」

ラダトームとドムドーラの間には橋が二箇所存在している。しかしドムドーラの生き残りを探す為に派遣された搜索隊が調査を終えて帰還する途中、ラダトーム側の橋を渡る際にモンスター襲撃を受けてしまい、人が通れないほど橋が破壊されてしまったのだ。

幸い搜索隊には大怪我をする者は出なかったものの、それ以降メルキド方面へ行く事は出来なくなり、今もまだ修復中で人は通る事はできない。

メルキドからの物流が途絶えるのはラダトームにとって大きな打撃だ。本来なら橋の復旧にはもっと時間が掛かるようだが、急ピッチで工事が進んでいる。

「橋が直るまでは向うにはいけない、となると東か北になって」
「なるほど」

「一応行き先の目標は考えてるんだけど……」
地図を広げて見せながら、アリスはラダトームの場所を指差し、そのまま歩く予定の場所をなぞるように東の方へ動かし、『マイラ』と村の名前が書かれている場所で止めた。

「ここに行くか、もしくは……」

もう一度指をラダトームへ戻すと、今度は北の方角へ動かし、北西にある町で止めた。

「ここへ。とにかく今は姫に関する情報が欲しいんだ。姫を救助するのを優先したいから」

ラダトームから近い町はこの二つだ。近場からあたって情報を集めようとアリスは考えていた。

二つの名前を交互に見たバリーは、そういえば、と何かを思い出したように呟いた。

「旅の商人に聞いたんだがな、ガライの町で、姫を目撃したとか言う奴がいたらしい」

「……それは本当?!」

「本当かどうかは行ってみなければ分からない。どうせ行き先が決まっていらないなら、まずはガライの町を目指してみるのはどうだろう」

ガライの町は、東にあるマイラの村よりも距離は近い。目撃情報の信憑性は確かとはいえないが、手がかりがあるかもしれない。

「それに東には他の自称ロトの末裔達が向かっていると聞いている。確かに向かうなら東の方がいいかもしれないが、ガライの町で情報を集めてから向かうのでも遅くはないだろう」

北にはガライの町しかないが、東にはマイラの村の他に、村から北へ向かい、トンネルと抜けるとリムルダールがある。話でしか聞いたことは無いが、リムルダールはメルキドと同じくらい栄えているようで、何かしら情報があるかもしれない。

「そうだね。北にはガライの町しかないし、東の方が情報が集まっているかもしれないけど。……それでみんな東に向かったって言うのなら、私は北から回った方がいいかもね」

東方面はすでに他のロトの末裔達が向かっている。先に向かっている者がいるのなら、アリスはまだ向かっていない場所から探した方が効率がいいと考えたのだった。

「とりあえず最初に向かう場所は決まったな」

「うん。ありがとう、バリー」

「気をつけてな」

「バリーも元気で。……そうそう、何かいい物を仕入れたら私に回してね」

「努力はしておく」

アリスはその答えに笑顔で返し、店を出た。

他の護衛団の仲間には、王宮へ行くより前にしばらく会えないからとすでに挨拶を済ませている。バリーにも王宮へ向かう前に旅立つ事をつけていたが、ラダトームに来てから一番世話になった人なので、もう一度挨拶をしにきたのだ。

これで、出発前の用事は全て終わった。

(……よし。行こう)

行く場所は決まった。まずはガライの町へ行き、ローラ姫の目撃情報を得ること。

(アレフ、おばさん、ユウ……)

アリスは南の方角を向いた。

ラダトームの遙か南にドムドーラがある。ここからは見る事はできないが、目を瞑れば今なお鮮明に町の景色が思い出された。

けれど、それはもう思い出の中にしかない。今はただ、廃墟と化した残骸が残っているだけだろう。

(私は世界を救う勇者とか、そんな大層な人になれるか分からない。でも誰かを救える人にはなりたいた。今度こそ)

守りきれなかったドムドーラの町に許しを請うように深く頭を下げると、アリスは町の外へ歩き出した。

町から一步出れば、どこからモンスターが出てくるか分からない世界だ。

だが、ラダトーム周辺に巣食うモンスターはアリスの敵ではなかった。ドムドーラで日々実戦の毎日だったアリスにとって、この辺りのモンスターは肩慣らしにもならない。ラダトームに来てからも訓練を欠かさず、他の団員達ともよく手合わせをしていたのだ。結局アリスはガライの町へ行く数日間、命の危険に会う事は一度もなかった。

ガライの町。

ここはその昔、吟遊詩人のガライが長い旅の終わりにたどり着き造ったとされる町だ。その為ガライの町と呼ばれている。

アリスは町に着くなり宿屋を目指した。

野宿続きだったのでベッドでゆっくりしたかったのだ。しかし宿屋で部屋をお願いするなり、何故かアリスは宿屋の女将に怪訝な目で見られた。

「アンタみたいな子供が一人で旅をしているのかい？」

金はちゃんとあるのかい？と言われたようなものだ。旅をしている理由を話すが、女将は半信半疑といった様子で、なおもアリスをジッと見てくる。

「……僕は、勇者ロトの末裔として旅をしています」

そう言いながら宿賃として所持しているゴールドを出して見せるが、盗んだものじゃないだろうね、と疑われ続けた。

（そんなに不審者にみえるんだろうか）

このご時世、モンスターに襲われたり、強盗に襲われたりで、親を失う子供も珍しくはない。だから疑われるのは仕方がないのだろうけれど、この調子では何処へ行ってもこの女将と同じような態度をされそうだ。

困ったアリスは、そうだ、と思い出して王から預かった指輪を見せた。

それを見た途端、女将の態度はまったく変わった。

早く言って下さいな、と急にニコニコとしだし、空いている部屋は無いか台帳を急いで調べ始めた。

（やっぱり、王が後ろ盾だと話が早い）

勇者ロトの末裔を支援しているというのは、すでに全ての町へ伝達されているのだろう。さっきまであんなに疑っていた態度は何処へやら、これ一つで信用を得てしまった。

特別な方法で作られたこの指輪を偽造するのは難しい。仮にそっくり同じ物を作ったとしても、指輪にこめられた魔力が違うので、町の魔法使いにでも見せれば一発でバレてしまう。

この指輪をもつ者はロトの末裔と認められた者のみなので、見せれば顔を覚えられてしまうだろう。仮に偽物を作ったとしても、偽造した指輪は魔法使い以外には騙せたとしても、所持している者は限られているのでいずれは偽者だと判明してしまう。

勇者ロトの末裔は皆の希望。その名を騙り利用したとなれば、下される罰とは別に民衆が黙ってはいないだろう。ロトの末裔ではな

いが世界を救いたいという志があるのならまだしも、私利私欲の為に利用すれば、その後は重い刑罰が待っている。そして人々を謀ったとして民衆の記憶に残るだろう。

だから王が直々に謁見し、見極めていたのだ。

もし、この指輪を偽造、あるいは盗み使用したとすれば、それ相應の覚悟を決めなければならない。そしてそれを行うにはリスクが高すぎるため、本物かどうかの正式な判断が出来ない女将でも、偽物ではないのかという疑いはもたれなかった。

「……申し訳ございません。只今全て満室のようでした……」

「え？」

「一つだけ、本来なら二人部屋のところに一名がご宿泊しております。宜しければこの方に同室でも良いか打診してみますが」

どうしますか、と聞かれたが、アリスは迷わず首を横に振った。

「わかりました。今日は諦めます」

「申し訳ございません」

満室なら仕方がない。アリスは早々に宿屋を後にした。

（知らない人と同室、は、バレたらマズイし）

女性の一人旅は滅多にいない。というか、おそらく無いに等しい。アリスが珍しいのだが、男性として旅をしている手前、女性とバレれば何かと面倒になる。

（町の中での野宿なら、外の野宿よりましか）

色々な店も近くにあるし、せつかくだし温かい食べ物でも食べて落ち着こう。

宿屋を出たところで、アリスは何処かで食べる場所がないか探す事にした。ここは海の近くなので魚介類が豊富だと聞いた事がある。食事を楽しんでいる場合ではないのだが、ここへ来るまでの質素な食事を考えれば、今日くらいは奮発しようかと考えてしまった。

（どうせ今日も野宿決定だし。ご飯ぐらいは……？）

考えながら歩いていると、どこからか音楽が聞こえてきた。音楽等に関してはまったく詳しくはないアリスだったが、とても綺麗な

音色だったので、思わず聞き惚れてしまった。

「……こっちからかな」

音楽は町の広場から聞こえてきた。アリスは曲に惹かれるように、いつのまにかその広場へ向かって歩いていた。

広場には人だかりが出来ていた。その人々の中心からあの聞き惚れるような綺麗な音楽が聞こえてきていた。

アリスは人の隙間をぬって中心へ向かった。一体誰がこんな綺麗な曲を演奏しているんだろうかと、顔だけでも見たい、とやっと中心までたどり着いた。

が、アリスがたどり着いた途端、突然綺麗な曲をかき消すような不協和音が響き渡り、人だかりはあつという間に散っていった。

「……んー、なんでいつもオレが歌うと皆一斉にいなくなるかな」

酷いなあ、とブツブツ言いながら顔を上げた人物と、アリスは真正面から目が合った。

周りにいた人はすでに誰もいないのだが、アリスは逃げ遅れたというか、あまりにも突然だったので呆然とその場に残ってしまっていたのだ。

「あれ？アリスじゃん。こんなトコでどうしたの？」

さっきまで弾いていたと思われる豎琴を脇に抱えながら、一年前の命の恩人が、不思議そうにアリスに近付いてきた。

「お前、前にもまして男前があがったなあ」

「な……なんで、ガイがこんなトコにいるの？！」

久しぶり、と笑顔でアリスの頭を叩くガイの手を、アリスは思いっきり振り払った。

「こんなトコって、それはオレのセリフ。お前こそ、こんなトコになんか用？」

「わた……じゃなかった、僕は勇者口トの末裔として旅をしているんだ！」

「勇者口トお？！……ふーん」

ジロジロとアリスを上から下まで見たガイは、急にプツと噴出した。

「一年経てばもっと女らしくなるもんだと思ってたけど、そうしてるとなんかお前」

「ガイ！……ちょっとこっちへ来い！」

アリスはガイの口を塞ぎながら、広場の端っこへ移動した。

「一体なんなんだよ」

「あのね、私は男として旅をしてるの！だから女とか、人が沢山いそうな場所で言わないで欲しい」

アリスは旅をするに至った経緯を簡単にガイに話した。ガイは「へー」やら「ふーん」と相槌を打ちながら真面目に聞いているのかよく分からない態度だったが、ちゃんと話は最後まで聞いてくれた。……と、言うわけで勇者の末裔のアレフとして旅をしてるの」

「……まあ、アリスがそう選んだなら別にオレはいいと思うけどね」

「アリスじゃない、アレフ！」

「はいはい」

「それで、ガイは何をしていたの？」

自分だけ話すのは癪だったので、アリスはガイにも話を聞いた。

「オレ？オレは見ての通り吟遊詩人……の修行中」

「はあ？！」

何を言ってるんだ？とアリスは呆れた声で聞いた。

「まだまだ未熟だから旅をしながら腕を磨いてるってワケ。資金は商人を手伝ったりして稼いでるんだけど……聞いてただろ？今の演奏」

豎琴は褒められるんだけどね、とガイはため息をついた。

「どうも歌はちょっとだけ、まあほんのちょこっただけ下手みたいでさ。豎琴を弾いてる時はいい感じなんだけど、歌がつくと途端に駄目らしい」

確かに豎琴は上手かったと思う。全然音楽に詳しくないアリスでさえ聞き惚れ、誰が弾いているのか興味が出たくらいなのだ。

しかし、歌はちょっと下手どころではない。あれはもはや公害だ。
「でも小さい頃からの夢でさ。いつか絶対にガライの再来とまで言
われるほどスゴイ吟遊詩人になる！」

「……へえ、がんばってね」

（豎琴だけなら再来と言われるんじゃないかな。豎琴だけなら）

口に出して言いたかったが、黙っていた方が良さそうだとアリス
は乾いた返事だけした。

第一章 旅立ち4

ガイは、どれだけ吟遊詩人が素晴らしいのかを語り終わったあと、ふと何かを思い出したかのように手を叩いた。

「そうだそうだ。お前、ローラ姫の情報を集めてるんだろ？昨日酒場で会った奴が、なんかそんなこと話してたぞ」

「本当?!」

アリスはすぐに酒場へ駆け出して行きそうな勢いだったが、ガイに首根っこをつかまれ阻止された。

「離してよ!!」

「酒場は夜からだ」

「あ……」

「仮に開いていたとしても、今のお前じゃ入れてもくれないぞ。少し落ち着け」

ガイの言うとおりだ。焦りすぎて突っ走りそうになっていたようだ。

アリスが大人しく俯いていると、ガイはようやく手を離れた。

「で、夜になったら酒場に行くのか？」

「当然」

「その格好で？」

「う……」

酒場は子供が1人で入れる場所ではない。今の格好のアリスが門前払いされるのは目に見えている。

「オレと一緒に行ってやるよ」

え？とアリスが顔を上げると、ガイは豎琴などの道具を片付け始めている。

「つつても、その格好のお前と一緒に行くのはなあ。ガキ連れなんかじゃ話にならないしな」

「それって、この格好を止めろってこと？」

つまり、ガイはアリスにちゃんと女の格好をしてこいと言っているのだ。

「それなら1人で行ってくるよ」

「バーカ。若い女が1人で夜の酒場をウロウロするなんて、絡まらない方が不思議だぞ。お前なら絡んだ相手を殴るぐらいはしそうだけれどな。わざわざ揉め事が起こると分かっているのに行くほどお前は馬鹿なのか？」

癪に障る言い方だが、言われてみればそうかもしれない。酔っ払いなら尚更、理性の箍が外れ易いだろう。絡まれて殴り返して乱闘、だなんて、アリスだってしたくはない。

「……あ、でも！私に絡む人なんていないんじゃないかな」

酒場にいる女性といえば、店の店員か露出度の高い人がいるにちがいない、と酒場などには一度も行った事がないアリスは想像した。そんな人が周りにいるなら、自分に声はかけてこないだろうと思ったのだ。

「性別が女なら顔がヤバくても何でもいいってヤツだっているぞ」

「そっか。じゃあやっぱりガイと一緒にいった方が……？どうしたの？変な顔して」

誰でも声をかけてくるなら、やはり男性と一緒にいった方が面倒事に巻き込まれないか、とアリスが納得していると、ガイが呆れた顔をしていた。

「あのさ、今オレ、お前に対して結構失礼な事言ったつもりだったんだけど」

言い返してくるのを期待していたらしいガイは、拍子抜けしたと頭をポリポリかき始めた。

「そうなの？どんなこと言ったの？」

「……文句を言ってこないって事は、つまりそう思ってるって事か？んー、それは問題あるなあ。女としてどうよ」

「な、何のこと？！……あ、馬鹿って言った事？それは確かに力チンときたけど、確かに言われてみれば私の方が考えが甘かったかな

って思っただし」

気にしてないから、と言うアリスにガイは大きなため息をつく、全ての荷物を積み込み終わったカバンを持ち上げて背負った。そしてアリスに近付くと、アリスの頭をガシガシなでた。

「???」

「うそ。お前は……あー、えっと、まあまあ可愛いよ」

「は？」

「だから！失言だったよってこと。言い返されないと罪悪感が残るんだよ！」

「よくわからないけど、お世辞ありがとう」

なんだかよく分からないけれど、可愛いといわれたのでアリスは一応お礼を言った。しかしそれを聞いたガイは、更に深くため息をついた。

「……もういいや。オレはこれから一度宿屋に荷物を置いてくるけど、お前はどうするんだ？」

「私？私は昼ごはん、かな」

時間は丁度昼飯時を少し過ぎたくらいで、店などの混むピークが終わった頃だ。落ちていて食べるなら今がいいだろう。

「まだ食ってないのか？じゃあオレが美味しい店教えてやるよ」

そんな話をしていたからか、アリスのお腹の音が鳴り出した。

「思ってたよりもお腹がすいてみたい。その美味しいお店って所、楽しみだわ」

一押しのおススメなんだろうな、とアリスは鳴るお腹を押さえながらガイの横を歩き出した。

「あ、そうだ。人が多いところじゃ絶対にアリスって呼ばないでね。僕はアレフだから」

人気のない場所では素で話ができるが、少しでも人がいれば、女性だとバレないように振る舞わないといけないのだ。

「はいはい。つか、恥じらいっつーもん無いのかお前は」

「何言ってるの？あ、そうだ。これ貸して」

アリスはそう言いながら、ガイから荷物を一つ取った。

「そつちも持とうか？」

「はあ？何やってんだよお前。返せよ」

「お店を教えてもらうんだし、酒場にまで着いてきてもらうわけだし、荷物ぐらい持つてくつて」

早く貸してよ、と奪おうとするが、ガイは荷物を渡さないように抱え込んだ。

「あのなあ、楽器はオレの大事な体の一部みたいなもんなの！それに結構重いだろそれも」

「これくらい余裕」

強がりではない。護衛団時代から男性たちと同じように、武器や防具など自分の荷物はどんなに重くとも自分で持っていた。確かに女性が持つにとしては重いかもしれないが、ガイが言うほど重いとは感じなかった。

「マジで？……馬鹿力だな」

「うん。剣とか使うから、自然に力がついていったんだよね。団員中でも結構強い方だったよ……」つて、なんでまた変な顔してるの？」

「お前さ、生まれてくる性別間違えたんじゃないの？」

その言葉に、アリスは思わず立ち止まってしまった。

（男だったら……もしかして、皆を守ることができたのかな）

ドムドローが襲撃される前まではさほど気にしていなかった事なのに、あれ以来何度も思ったことだった。

女性ではなく男性として生まれていたのなら、もつと強く、もつと頼りになれたのに、と。

仮定の中ではいくらでも良い所が思い浮かぶ。実際に男性として生まれていたら、良い所ばかりではないことぐらいは分かっていたが、それでも想像せずにはいられなかった。

一年前までは自分が女性だろうが男性だろうが構わなかった。だがあの襲撃がアリスの考えを変えさせていた。

男性だったのなら団員がアリスに気を使うこともなかった。そし

て、きつと今よりもつと強くなれる事が出来たはずで、もつとみんなを守る事が出来たはず。

（たつた1人男が増えたところで、あの状況が変わるわけがないのはわかつてるけど。でも）

「……ガイが羨ましいな」

ポツリとつぶやいたアリスは、一瞬苦笑した後早歩きでガイを追い抜いた。

「こんなのが重いって、ガイはもう少し力を付けた方がいいね。ひ弱だとすぐにやられるよ」

「ひ弱じゃねーぞ。ひ弱だったらそもそも旅なんてしねーっての」

追い抜かれたのが癪だったのか、ガイはすぐにアリスを追い抜き返した。

「お前はもうちょつと女らしくしろよ。どうせお前は鏡とかも持ち歩いてないだろ？だめだぞー、女の子は身なりには気をつかわねーと」

アリスが周りに聞かれるのが嫌だと言ったからか、ガイはワザとらしく耳元でボソボソ言つて来た。

「女らしく、か。そういえば、昔からよく言われてたなあ」

小さい頃から遊ぶ時は男の子に混じつて勇者ゴツコ。大きくなるにつれ父に連れられ実戦ばかり。そしてつい最近まで護衛団で人々を守る仕事。女の子の遊びより、女の子の流行のものより、アリスにとつてはそれが当たり前で、そして興味を持つのはそういったものばかりだったのだ。

無理をして男性のように振舞っているわけではなく、カッコつけてそうしていたわけでもない。それがアリスにとって自然だった。あの日まで髪の毛を伸ばしていたのは全然女の子らしい行動をしないアリスに母が呆れ、せめて外見だけでも可愛くさせようとしたためであり、アリスにとつては伸びていようが短かろうがどうでもよかった。母が亡くなった後、叔母もアリスを女性らしくしたいと思つたらしいが、やはり諦めざるをえなくなり、せめて髪の毛だけは

伸ばして欲しいといわれたので伸ばし続けていた。

「自分らしくはしてたつもりんだけどね。女らしくはしてなかったかも」

「あのさ、面倒くさくねーの？それ。無理してない？」

それ、とは男のフリをしている事を指しているのだろう。そんなに無理をしているように見えるのだろうか、とアリスは首を傾げた。「無理してる事といえば、僕って言い直している事くらいだよ。後は普通にしてるけど」

元々が護衛団勤めなので、男性社会に染まっていたアリスにとっては、むしろ女性らしくしろと言われるほうが無理が出てきてしまう。

「……ま、とにかく無理はすんなよ」

ガイはそう言いながら、またアリスの頭を撫でてきた。

「同い年なんだから、それ止めて欲しいんだけど」

「触り易い頭してる方が悪い。……そうだ、せっかくだし再会祝いに昼飯を奢ってやるよ」

「奢ってくれるの？」

再会祝いならアリスもお金を払うべきなのだが、奢ってくれるという言葉に素直に甘えてしまおうと思った。

「ありがとう！じゃあ浮いた分、今日の寝袋は気持ちのいいもの買おうかな」

旅の資金は結構持つてきていたが、なるべく節約したいところだった。本当なら浮いた分のお金は今後の旅の資金に足したいが、今日は町の中なのに野宿なのだ。昼飯代が浮くなら、せめて町の外で使っている寝袋よりマシなものを使いたい。

「……………今、なんつった？」

「ん？なんか変な事言った？」

「お前さ、一応この町にも宿屋があるんだけど」

「ああ。なんか満室だって。しょうがないよね」

残念だよね、と笑うアリスだが、ガイはまったく笑っていない。

「女が町の中で野宿なんかするんじゃないよ！」

「だから今は女って言うな！」

「そうじゃねーだろ！」

「大丈夫だって。女に見えないから」

「違うだろ！そういう問題じゃねーんだよ！」

ガイはアリスの腕を掴むと、大またで歩きながら宿屋に向かっていった。

「おい女将、確かオレの部屋って2人で泊まれるんだったよな。こいつも追加だ」

「え？あ、わかりました！」

女将は慌てて従業員達に、2人用の準備をするように指示を出しはじめた。

「……なんだ、2人部屋に1名ってガイのことだったのか」

他の人だったならバレル心配があるが、ガイなら問題ない。

「今日だけだからな。宿屋はこしかないし、野宿させるわけにいかねーし」

「あ、2人部屋って2人で泊まるなら1人部屋よりも1人分の値段が安いんだ。ねえガイ、もし明日も泊まるならまた一緒によろしく」

女将に値段などの説明を受けたアリスは、お得だね、とガイに笑顔を向けた。

「また一緒に……護衛団のヤツら、今まで結構苦労しまくってたんだろぅなあ」

「苦労？何が？」

首を傾げるアリスを見たガイは、やれやれといったようにまたため息をついていた。

ガイのおすすめの場所で昼食を食べた後、ガイに町中を案内してもらったことになった。

吟遊詩人を目指しているガイにとって、ガライの町は端から端まで熟知しているらしく、ウンチクも交えた説明を、アリスは半分聞

き流しながら店などを見て周った。

武器や防具で良い物が無いか物色していたが、あまり気に入った物はなかった。これなら、バリーが買い付けてくれたものの方が遥かに使える。

「町の案内はこんなもんかな。後は道具屋にでも行くかな」

「ここは？」

この町に入ってから常に視界に入っていた大きな建物の説明がまだだと、アリスは不思議そうに指差して聞いた。町の外からも見えていたのだが、町の北側の大きな建物は殆どを壁に囲まれていて、唯一ある入り口の扉は頑丈な鍵がついており、とても入れそうもない。

「ああここね。墓があるんだよ」

「墓？」

「そ。まあ余所者には関係ない場所だし、気にすんな。どうせ入れないしな」

そうなんだ、とアリスは建物を見上げてみた。

この中に墓があるにしては随分嚴重なんだな、としばらく眺めていたが、隣を歩いていたはずのガイがとくに先へ行ってしまうている事に気がつき、慌てて後を追いかけた。

「えー！この町では聖水は売ってないのかよ」

道具屋につくと、ガイが店の店主に文句を言っていた。

「申し訳ございません。聖水の扱いはここでは……」

ガイは舌打ちをすると、ようやく追いついたアリスに向かって残念そうに肩を竦めて見せた。

「聖水があれば少しは旅が楽になるんだけどなあ」

「しょうがないだろ。アレは作れる人が限られてるんだから。というか、ガイはここでは売っていないことを知らなかったの？」

「ここの道具屋はあまり利用しないからな。ま、ないならしょうがないか。オヤジ、薬草をいくつかくれ」

アリスは特に買う物はなかったなので、なんとなく店内を見て周り

ながら、ガイの買い物が終わるのを待っていた。

（あ。これって、竜のうろこ？）

商品の1つである竜のうろこを手にとって見た。

（なんか、私が持っているのと違うな）

弟と交換したうろこはボロボロになっているが、直接ユウから貰ったうろこはまだ綺麗なまま残っていた。

お守り代わりに首からぶら下げていた自分の竜のうろこ、店頭と並んでいた物を見比べてみても、やはり違うように見える。

「お、お客様！それを何処で手に入れたんですか？！」

突然、後ろから店主に声をかけられ、アリスは驚いて振り返った。
「滅多にない代物ですよ！わたし共も噂でしか聞いた事がない。どうです？売ってはくれませんか？ゴールドなら普段の倍、いやそれ以上は出しますよ！」

顔を思いつきり近づけられながら言われ、アリスは引きつった顔をしながら首を振った。

「そうですね500……いや、それなら1000を出してもいいくらいだ！」

「え、えつと。これは」

「足りないですか？！いやいや、そうですね。特別な竜のうろこならもつと出しても惜しくはない！」

「ちよーつと待った！」

勢いに押されて何もいえなくなっていたアリスに見かね、ガイが2人の間に割って入った。

「オヤジよ、これはコイツの大事な物なんでちよつとやそつとじゃ売れねえんだよ。な？」

「え？あ、うん。すみません。これは売れないんです」

助かった、とアリスは店主から一歩離れると、自分の竜のうろこをしまいこんだ。

「こちら長年道具屋を営んでますが、そのような竜のうろこは滅多にお眼にかかれないもんなんですよ。どうしても駄目ですかね？」

「……そんなにすごいんですか？」

そこまで言わせるほどの物とは、いったいどんな代物だというのだろう。

「すごい何も、まあ見てください。これが普通の竜のうろこです。頑丈で多少の炎なら守ってくれるっていう、旅人には良いお守りだ。だがね、坊主が持つてるその竜のうろこは、そんじょそのらのものとはワケが違う。聞くところによると、体を焼き尽くすほどの炎からも守ってくれるって話だ」

そういえば、似たようなことをガイも前に話していたし、実際にアリスを炎から守ってくれた。

「輝きが他の竜のうろことは違うでしょう？一見ただけだと少しだけ違うように見えるがね、わたし共のような道具を専門に扱っている者からみれば、まったく違うんですよ」

「……貴重なもの、なんですね」

「ええ。ですからいくら出しても欲しいんですよ！」

アリスは一度しまった竜のうろこを取り出し、ジッと見つめてから店主に向かって首を振った。

「すみません。これ、大事な家族からもらった物なんです。……もしかしたら形見になってしまいかもしれない物、なんです」

まだ生きているかもしれない、そんな希望と一緒にいつも脳裏には全滅したという報告がよぎる。

でも、まだ死んだと決まったわけではない。状況からそう判断されているだけで、アリス自身が実際に見たわけではない。だからまだ、生きていると信じている。

「……いや、やっぱり形見じゃないです。とにかくいくらお金を積まれても売れません。大事な家族からのプレゼントなんです。これは絶対に手放したくないんです」

「お前……」

ガイが何かを言いたげな顔をしているが、アリスは気にせず店主に向かって頭を下げた。

「頭を上げてください！流石にそこまで大事なものなら無理には言いませんよ」

店主は慌ててアリスの顔を上げさせた。

「とても大事なものなんですね。今度その持ち主に会ったら、うちで高値で買い取るとも言っと思っています」

アリスの話から、竜のうろこの持ち主が何か大変なことになっていると察したのか、店主はそれ以上はしつこく食い下らずに話を終わらせた。

「ええと、売れはしませんが、その代り薬草を頂こうかな」

「薬草なら、坊主の兄ちゃんがさっき買いましたよ？」

「え？」

「ん？」

「んん？兄弟じゃないのかい？」

ガイと顔を見合わせたアリスは、思わず吹き出してしまった。

「違うんですか？すみませんね、雰囲気はどこか似ていましたから似てるかな？とアリスはガイを見上げてみたが、似ているところなんて見当たらない。

「オレはこいつの兄じゃねーよ。オレが勇者さまの兄だなんて、こいつが嫌がるだろうしな」

「ガイ！！」

いきなり何て事を言い出すんだ、とアリスは足を思いっきり踏もうとしたが、ガイは寸前で足を引っ込めた。

「ああ、坊主が勇者の末裔か。宿屋の女将から聞いていたが、本当に子供だったんだな。……ああ失礼、薬草だったね。この兄ちゃんに大量に売っちゃったから今店頭にはないんだよ。倉庫に確かあったはずだから、ちょっと待っていてくれ」

店主はそう言つと、店の奥へ行ってしまった。

「……嫌味？」

「何がだよ」

「勇者さまの兄とかなんとかって」

「さあね」

アリスはガイを睨むが、ガイはまったく気にした風でもなく、ぶらぶらと店内を歩き出した。

「あ、あの……」

ガイがアリスから離れると、アリスに誰かが声を掛けてきた。

店主と話をしている間、どうやら他の客も店に来ていたらしい。

「はい。なんでしょうか」

「キミ、勇者なんだって？」

「え？」

「よ、よかった」

オドオドした様子の青年は、そう言うなりアリスの両肩を思いっきり掴んできた。

「え、えつと??」

「おい、何やって……あれ？こいつは」

店内を見ていたはずのガイがいきなり青年の腕を掴んでアリスから引き離れた。そのまま文句でも言うつもりなのか、ガイは青年の首元を掴んだが、青年の顔を見るなり、ガイは掴んだ手を離れた。

「こいつだよこいつ。ローラ姫の話をした奴」

「本当ですか?!」

アリスはガイを押しのとけると、青年の手を握った。

「お願いします！ローラ姫の話を聞かせてください！」

青年はアリスの行動に驚いた様子だが、すぐに頷くと、ぽつりぽつりと話し始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6621/>

DQ1 勇者の末裔

2011年2月6日01時10分発行